
すーぱぁお母さんとピクニック

K1.M-Waki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すーぱあお母さんとピクニック

【Nコード】

N6529U

【作者名】

K1・M・Waki

【あらすじ】

今日は家族みんなでピクニックだ。

でも変なんだ。去年来たときと森の様子がおかしい。木や土壌が汚染されいるみたいなんだ。またまた事件の予感がする。

すーばあお母さんとピクニック【1】

すーばあお母さんとピクニック【1】

(1)

僕は松戸庄之介。小学校の六年生だ。

父さんは清次郎。電機会社のサラリーマンで婿養子だ。

だから、いつもお母さんには頭があがらない。

生まれた時から付き合ってる僕がそう言っただから、まず間違いない。

毎朝暗いうちに起きて家事をこなし、御殿場の会社へ出掛ける。

夕方も一目散に帰ってきて、家事の続きをする。当然出世なんか出来る訳ないし、給料だって上がる筈がない。家で働いているのは父さんだけなのにどうして暮らして行けるのだろう？

不思議な事だ。

今、父さんはお弁当を作っているところだ。

今日は連休の真ん中の日曜日。家族みんなでピクニックに行くんだ。既にテーブルの上にはおにぎりやのり巻き、サンドイッチ、揚げ物類、煮しめ、サラダ等々が山のように並んでいた。お約束の出汁巻玉子もしっかり作ってある。

父さんはそれらを手際良く(と言うより手品のように)折り詰めにしていく。ところが、最後の一つを0.275秒で詰め終わると、ぴたりとその手が止まってしまった。

しばらく何か思索していたようなのだが、くるりと後ろを向くと「頼む」

と、40cm角ほどの籐で編んだランチバッグをお母さんに差し出した。

如何に父さんといえども、小さなランチバッグの中に十数個の折り詰めは物理的に詰め込めなかつたのである。

「もう、しょうがないわねえ」

「すまん・・・」

お母さんは面倒くさそうにランチバッグを受け取ると、テーブルの上の折を無造作に放り込み始めた。

「は〜い」

数分後には全ての折詰めとお箸やフォーク、ナプキン類等が小さな編み上げのランチバッグの中に収まっていた。

「・・・そ、そんなバカな」

僕等には見慣れた極当たり前の事だったんだけど、初めて見る輝兄ちゃんには新鮮な驚きだったらしい。まだ目を白黒させている。

僕にも一体どういう訳なのか未だによく判らないのだが、お母さんの手に掛かれれば空間の物理的の物理的大小は意味を失うらしい。純粹な情報で圧縮されるんだろうか？

まさか四次元ポケット、っていうはずはないだろうけど。

多少疑念は残るが、便利なんだから、まあいいじゃないか。

「みんな、もう準備は出来てるか？」

「いいよお」

「OKです」

「いつでもいいぞい」

「よし、じゃあ、出発だ」

僕は思い思いの荷物を詰め込んだリュックやバッグを持って出発した。

(2)

天気予報は一昨日から連続で大雨だったんだけど、今日僕等の出掛けるところだけは快晴だった。

カーラジオでは、やっぱり雨雨雨。

「上手い具合に晴れましたねえ」

輝兄ちゃんが不思議そうに言った。そんなのは当たり前的事なの

にね。僕等がピクニックに行くのに、雨が降る訳ないよ。

お母さんは、いつものようにつまんなさそうに空を眺めていた。時たま一瞬、お母さんの瞳が金色に光るように見える時もあるが、これは光の加減だろう。

バイパスを一時間ほど流してから、やや細めの県道に入る。更に三十分ほど走ると、急ごしらえの駐車場が見えて来た。

雨続きで、しかも天気予報も確率100%の雨と言ったためか、折角の晴れた休みにしては車や人の数は少な目であった。多分、他のところは大雨なんだろうな。

駐車場の隅っこの売店も、今しがた店を開いたばかりのようで、かなりの年配のおばさんが忙しく立ち働いていたが、お客はまだ誰も来てはいない。

この駐車場からハイキングコースを徒歩で2時間くらい行くと、目的の高原に到着する。

今は、10時をちょっと過ぎたところだから、ちょうどお昼の時間に着く筈だ。

この頃は開発などで景観が損なわれて来たけれど、標高300mほどの山と高原はまだまだ自然を残しているはずだ。少なくとも去年まではそうだった。

僕等は車から荷物を引張り出すと、ハイキングコースの入り口へ向かった。

(3)

朽ちてぼろぼろになった門柱（本当は違うのかもしれないけれど）をくぐるうとした時、いきなり中型の4WDが飛び出して来た。門柱を出てすぐ、急ブレーキをかけて止まる。

ぬかるんだ原っぱに、タイヤの跡が深くきざまれた。

このハイキングコースは自動車は進入禁止の筈なだけだな。

えらくマナーの悪い人がいるなと思ったら、乗っていたのは見る

からに人相の悪いやからだった。

面白い事に、全員が全員、パンチパーマにサングラスで統一されていた。

もし、暴力団に制服があったとしたら、きっとこうなるんだろうなあ。

なんて、バカな事を考えていると、チンピラ達の中でも一番頭の悪そうなのが、ウィンドウから首を突き出した。

「バツキャットロー！こんなところでモタモタしてんじゃねえ！」とののしると、加えていたたばこをつばと共に地面に吹き出した。

後部座席からは、空き缶や食べかけの弁当が無造作に投げ棄てられ、辺りに散らばった。

「マナーの悪い連中ですね」

輝兄ちゃんが嫌そうに呟いた。

「物を粗末にするとバチが当るぞい」

と、おじいちゃんが言った。

「なんだあ。文句あんのかよお」

「ガキやじじいは引っ込んでろい」

「へっ！こんなやつらほつといて、さっさと行こうぜえ」

哄笑をまき散らしながらチンピラ共は車を降りると、売店の方へ向かって行った。

「ちよと腹が立ちましたね。注意してやりましょうか」

輝兄ちゃんが奴等の方に向かって行こうとすると、

「やめておけ」

と、父さんが止めた。

「ふんっ、クズどもが」

おじいちゃんも露骨に嫌そうな顔をした。腰を曲げてその場に棄てられた残飯や火の点いたままの吸い殻を拾うと、ブツブツと何かの経文を唱えはじめた。

しばらくすると、売店の方から悲鳴が聞こえて来た。きっとバチが当たったんだろう。

いつの間にか、おじいちゃんの手の中から吸い殻なんかが消えていたが、僕等はそんな事はお構いなしに、ハイキングコースへと入って行った。

すーばあお母さんとピクニック【2】

すーばあお母さんとピクニック【2】

(4)

コースを皆で歩いていているうちに、僕はさっきの嫌な事はなんかはすっかり忘れてしまった。

雨上がりのハイキングコースはさわやかで、サンサンとした陽光が雨の名残をたたえた梢から漏れ落ち、ややぬかるんだ地面を照らしていた。

気温はやや低め。冷やりとした山の空気の肌触りは、ハイキングにはもってこいだった。どうしてこんないい日に、皆やってこないんだろうね。

山道ではすれ違う人もなく、僕等の一行だけがぶらぶらとコースを登っているようだった。

コースを歩いてるうちに、僕は妙な事に気付いた。何となく去年と違うんだ。それから、父さんの顔が妙に厳しくなってきた事だ。

「気が付いておるかの?」

しばらくすると、最後尾を歩いていたおじいちゃんが呟くように言った。

「ええ。ひどいもんですね。ここもそう長くはないでしょう」

父さんが答えた。

「そんなにひどいんですか? 見た目は別に変わりありませんけどね」

これは輝兄ちゃん。やっぱり何かおかしいらしい。何かおかしいのかまでは、僕にはよく解らないんだけど……。

「ああ……そうだな、このまま放っておけば、後、1・2年で取り返しがつかなくなるだろうな」

「正確には、1年と125日に12時間17分。実際には投棄され

る量が更に増えるだろうから、380日つてとこねえ。3ヶ月以内に手を打たないときの話だけどー」

クンツと鼻をひくつかせてから、お母さんが眠そうに応えた。

「ふむ。大分深刻じゃのう」

僕には今いち飲み込めないんだけど、何かそうとうに大変らしい。

「投棄場所は？」

父さんとお母さんが同時にある方向を指差した。

輝兄ちゃんが軽く背伸びをして指差す方向を眺めると、

「コースの近くですね」

と、言った。

「帰りに寄ってみるかのぉ。何がしか面白いものが見られるやも知れんぞ」

おじいちゃんが目を細めながら呟くと、クツクツクツと小さく笑った。

「帰りにちよつと寄り道をするが、構わんな」

父さんに真顔で言われて（実際のところ父さんが笑ったところは未だかつて見たことがないんだけど）、僕は肯くだけだった。

一体、この山で何が起こってるっていうんだ。

(5)

やや早足で歩いているため、昼前には目的の高原に着くはずだった。いや、実際には着いていたのだが、その景色は去年とはまるで違っていたために、最初、僕はそこが本当に目的地なのかどうか分からなかったんだ。

僕の目の前の”元”緑の高原は、一面に赤茶けた葉の草木で覆われていた。

ほとんどの木は赤茶けた葉をこびりつかせたまま立ち枯れており、所どころは赤黒い地面が剥き出しになっている。

「すごいなあ」

輝兄ちゃんが呆気にとられたような声を出したけど、僕にはそれを責める気にはなれなかった。まさにその通りなんである。たった一年も経たないうちに、あの綺麗な原っぱがこんななるなんて。目の前に事実を突きつけられても、まだ信じられない。

一体、何があったっていうんだろう。

少なくとも、テレビや新聞で大々的に報道されてても不思議じゃない出来事の筈だ。いくら僕が小学生でも、テレビのニュースくらいは見てるよ。それで知らなかったんだから、誰も気がついてないか、気にしてないかのどちらかだろう。

「ちよつと見てみるか」

父さんが手近の木に近づくと、開いた掌を無造作に斜めに振りおろした。軽く撫でるようなその一動作で、直径20cmほどの木の幹は、父さんの胸の高さで滑らかな切り口を見せて切断された。

僕等は、その切断面に見入った。(お母さんだけは、つまんなそうにそっぽを向いていたんだけれど。)

「何だあ、こりゃ」

輝兄ちゃんが素っ頓狂な声をあげた。確かにその通りだった。

枯れ木の中身は、スポンジ状にスカスカになっていた。のみならず、赤緑色の結晶体が内部にびっしりと析出していたのだ。

「これ、何だろう?」

僕が手を出そうとすると、

「止めとけ。この木のようになっちまうぞい」

と、おじいちゃんが止めたんで、僕は慌てて手を引っ込めた。

「これって、毒なの?」

僕が訊くと、

「御名答」

と、輝兄ちゃんが応えた。

「木の中がこんななってるって事は、地面の中も汚染されてるって事だよね」

「そうさなあ、こんな事を長い間ほつといたら、この辺りだけじゃあなく、麓の土地も水も、動植物もえらい影響を受けるじゃろうなあ」

おじいちゃんが眼を細めながら呟いた。

「ま、しようがないかのお。別の所も周ってみるかい？」

「そうですね。．．．あっちの方はどうです？」

僕等は父さんの指差す方へ向かった。くしくもその方向は、お母さんがぶらついている方向だった。

(6)

そこは、さつきまでいた処と比べれば、緑が存在すると言っ点ではるかに増しだった。

それでも、生えているのは明らかに人の手になると見える短い芝ばかりで、丈の高い草や樹などは、全く見られなかった。

その芝も、短い葉の先端が赤茶色の変色していたり、緑に勢いがなかったりしている。

「ここもか．．．」

父さんが呟くように言った。

「芝が植わってますね。誰かが手入れしてるのかな？ ゴルフ場にもするんでしょうかね？」

輝兄ちゃんも、僕と同じ感想を持ったようだった。

「この分じゃ、折角植えたこの芝も、すぐに駄目になってしまっな」

父さんが、地面を見つめながら呟くように言った。

「念のために、ここの土を採取しとこうかのお」

おじいちゃんが言うのと、輝兄ちゃんは肯いて、ポケットから小さなガラス瓶を取り出すと、その場に屈んだ。

輝兄ちゃんが地面に触れようとした時、いきなり雷鳴のような声が辺りに鳴り響いた。

「おめえらあ、一体そこで何やってんだ！」

声のした方には、真つ赤なタコ・・・もとい、禿頭の男が立っていた。老人と言うにはまだはばかられるが、でも、壮年期はとつくの昔に置き去りにしたような、ようするに元気な爺さんだった。悪いけど、まさしくゆでだこそっくりに、頭全体を真つ赤にしている。今にも、湯気を吹き出しそうな勢いだ。

「何やってんだ、おめえら！」

もう一度、爺さん（彼は気を悪くするかも知れないけど、便宜上そう呼んどく）は、怒鳴った。

「あ、あのう・・・、僕等のことですかあ」

輝兄ちゃんが、少々情けない声で応えた。

「他に、誰がおるんじゃ。おめえらに決まっとうろっがっ」

「・・・は、はあ」

「はあ、じゃねえよ。このポケが」

爺さんは、呆気にとられる僕等を尻目に、ずかずかと近づいてきた。輝兄ちゃんを指差すと、

「わしはなあ、おめえが何やってっかつて、訊いてんだよあ」と突っかかってきた。

あまりの剣幕に、輝兄ちゃんはもうたじたじになっている。助けを求めるように、父さんやおじいちゃんの方を、ちらちら見ていた。とは言つものの、父さんやおじいちゃんも素知らぬ顔を決め込んでいた。僕も知らん顔をしてそっぽを向いた。だって、父さん達が何も反応してないって事は、別に大した事ではない証拠だ。第一、爺さんがいたのに気がつかずに、不用意な事をした輝兄ちゃんの方が悪い。もつとも、爺さんに気がつかなかったのは、僕もおんなじなんだけどね。

「何してるって・・・何もやってませんよあ。僕等は、ただこへハイキングに来ただけですよあ」

輝兄ちゃんは汗だくになって、必死に弁解している。流石に、僕もちよつとかわいそうになつてきた。

「ハイキングだあ？ おめえら、KN興産のモンだろうが。嘘つく

んじゃねえ!」

「嘘なんかじゃありませんよ。その、何とか興業なんて知りませんよ。信じて下さいよ」

「輝兄ちゃん、何とか興業じゃなくって、KN興産だつてばさ」

「えっ? ああつと、そう。その、KL興産とは関係ないんですつてば」

「輝兄ちゃん、輝兄ちゃん、KLじゃないよ。KN。KN興産だつてば」

「えっ? えっ? . . . あーと、そのですねえ、. . . だから、人違いなんです」

「な、情けない。こんなんで、大学通るんだろうか?」

「. . . ふむ」

爺さんは、僕と輝兄ちゃんを交互に見やると、

「どうやら、わしの勘違いらしいのお. . . . いや、済まんかったな」

と言つて、はげ頭をかいた。同時に、頭の色も赤から肌色に戻ってくる。変色の早さも本物のタコ並みだ。

「あなたが、ここを手入れしているんですね」

さつきまで知らん振りをしていた父さんが、いつの間にか傍に来ていた。

「何でそう思う」

爺さんは、じろりと父さんを睨むと、ぶつきらぼうに応えた。

「手を見れば解ります。それに、その格好。遊びに来ている人のものじゃない」

「ふむ. . . . そうかい、なるほどな」

爺さんは、まじめな顔になった。

「確かにその通りだよ。あのならず者達なら、こんなに頭がいい筈ないしなあ」

それから、輝兄ちゃんの方をチラとみて、

「それに、こんな間抜けもおらんだろう」

「は、ははは」

輝兄ちゃんが、苦笑して頭を掻いた。

「もつとも、そこまで考えてるようなら、到底わしの手にはおえんだろうしな」

爺さんは呟くようにそう言うと、

「いきなり怒鳴ったりして済まんかったなあ。どうだい、お詫びと
いっちゃあなんだが、茶でも飲んでかんか？　ちよつと行ったとこ
に、わしの小屋があるんじゃ」
と、僕達を誘ってくれた。

「どうします？」

輝兄ちゃんが父さん達に訊ねた。

「折角じゃから、ごちそうになるうかの。昼飯時でもあるのぉ」
「そうですね。・・・おまえはどうする」

最後のはお母さんに訊いたものだ。基本的に僕と輝兄ちゃんには
決定権が無い。

「あたし、パス」

すぐ近くで、お母さんの声が出た。爺さんが驚いた風に辺りを見
渡した。

「そうか・・・、わかった。じゃ行きましようか」

「そうするかの」

こんな山の中じゃ、他人の迷惑になるようなことも出来ないだろ
うとふんだのか、父さんもおじいちゃんもあっさり折れてしまった。
当の本人は、300m位離れているゆるい斜面に寝そべって、バ
イバイをしていた。やつぱり、そこも荒れ果てていて、今にも枯れ
そうな芝が風に揺らいているのが、ここからでも見てとれた。爺さ
んはちよつと不思議そうにお母さんの方を見やると、

「あの辺も、本当は天然の花畑だったのになあ・・・」
と、独り言のように呟いた。

このまま昼寝でもしてくれてれば、お母さんも問題は起こさない
だろう、きつと。

お母さんを除いた僕等一行は、爺さんに連れられてその場を後にした。実は、これがとんでもなく甘い考えだった事が、後でわかるのだが……。

すーばあお母さんとピクニック【3】

すーばあお母さんとピクニック【3】

(7)

僕等が爺さんの小屋に着いた時、時刻はもう1時を過ぎていた。どつりで、お腹が空いている訳だ。僕等は、早速小屋の前でお昼をとる事にした。

実は、爺さんの小屋と言っても山小屋のような人の寝泊まり出来る類の物ではなく、芝や草木を植えたり手入れをしたりするための道具や肥料なんかを置いておくための、ようするに物置だった。

当然、中に入るといふ訳にはいかず、小屋の前の空き地で、という事になった。

「ちょっとだけ、待っててくれんかのう」

爺さんは、僕等にそう言うと、小屋の中からヤカンと中型の持ち運び式万能コンロを引張り出した。それから、これも小屋にあったポリタンクからヤカンに水を汲むと、コンロにかけた。

「心配すんなって。こりゃあ、わしん家から汲んできた水道水じゃ」
「よ」

そう言うと、コンロを誘導加熱モードで起動しようとしたのだが、どうも上手く動かない様だ。

「くそつ、まあたへそを曲げおつて。わしと同じで年期のいった偏屈じゃかな。もちっと待っててくれよな」

そう言いながら、あちこちいじり回していた。

「私が見ましよう」

見かねた父さんが助け船を出した。

「いやいや、こんなもの後少しで、」

「まま、そう言わずに。ちょっと見せて下さい」

父さんは、万能コンロの正面パネルと背面を調べていた。

「わかりましたよ。燃料電池のフィルターが目詰まりを起こしてたんです。後は、スイッチがちょっと接触不良を起こしているくらいですね。これならすぐに直りますよ」

「ほう、目詰まりねえ。血の巡りが悪くなったようなモンかい。これじゃあ、ますますわしとおんなじじゃなあ」

爺さんはそう言うと、はっはっはっとして笑った。

「これでよし。大事に使ってますね。クライオストロンも制御チップも何の問題も無いです。基本的に身体がしっかりしているところも、あなたとそっくりだ」

「そうかい。照れるねえ」

「これでよし。直りましたよ。・・・ちよっと、やってみてくれませんか」

父さんは、燃料電池のカートリッジを元に戻すと、爺さんにそう言った。

「どれどれ・・・」

爺さんは、さっきと同じように、ヤカンを乗つけると、パネルを操作し始めた。ブンとかすかな音がして、コンロが作動する。

加熱モードはIH方式。5分もしない間に、ヤカンから湯気が立ち始めた。

「ほう、すごいすごい。直ったどころか、買った時よりも調子がよくなってるなあ」

当たり前だ。父さんが直したのだから。

「電子レンジモードが使えれば、もう少し熱効率が上がるんですけど。ヤカンが金属製なもので」

「いやいや。上等だよ。・・・ちっと待っていてくれよなあ。すぐに茶を入れてやるからもう」

そう言いながら、爺さんはごそごそと急須やお茶葉を用意し始めた。

「ついでに、わしのいかれたところも治してもらえると、もっと助か

るがのう」

と言うと、冗談冗談と、笑った。

・・・この時、爺さんには分からなかったと思うけど、僕等は一瞬言葉に詰まった。

誰もが思ったのは、『この場にお母さんが居なくて本当によかった』って事だ。そんな、ある種の気まずさを何とかしようと思ったんだろう、

「俺達も、お昼にしましょうよ。・・・ウゲツ！」

って、輝兄ちゃんは傍らのランチバッグを持ち上げようとしたんだけど、そのあまりの重さにずっこけてしまったのだ。

「大丈夫か？」

父さんはそう言うと、軽々と小さなバッグを左手で持ち上げると、中から御座やマットを出し始めた。

輝兄ちゃんは肩を揉みながらそれらを受け取ると、何かブツブツ言いながら赤茶けた地面に広げはじめた。爺さんは最初は輝兄ちゃんをあきれたような目で見ていたのだが、そのうちにその眼が驚愕に変わった。輝兄ちゃんは差し出された御座を、無造作な片手の一降りで広げた。それは、約4m四方のしわ一つ無い座敷になった。それから、ナイロン製のマットをこれも片手で無造作に次々と放り投げると、見事に整然とした座席が出現した。

極めつけは、バッグから1m四方くらいのミニテーブルが出現した時だ。何せ、バッグは40cm四方しかなかったのだから。

それから、出るわ出るわ。父さんが作った大量のお弁当や、飲み物・デザートが、あつという間にテーブルに広げられた。

「おめえら、一体何もんだあ？」

爺さんも驚いたと言うよりも、最後には呆れたように訊いてきた。

それに対して輝兄ちゃんは、ニヤニヤしながら、

「だから、ただのハイカーだって言ってるでしょう」
って、得意げに答えた。

「折角ですから一緒に食べませんか？」

父さんが、誘った。

「いいんかのう・・・」

「別に毒は入ってませんよ。・・・ああ、勿論、葉っぱとか木の枝に化ける事も無いですから」

「そうかい・・・じゃ、ごちそうになるかのう」

爺さんは、まだ納得がいかないようだったが、僕達が食べ始めるのを見て、おずおずと空揚げをつまみ始めた。食事をしながら、爺さん　本名を原田源蔵さんと言うんだけど　は、ここでの事を話し始めた。

この辺りが、こんな荒れ果ててしまったのは、半年くらいほど前からだそう。

木や草が徐々に、または突然に赤みを帯びて枯れ始めたんだそう。生息していた虫や鳥達も、いつの間にか姿を消し、またあるものは死体となって消えていった。

「わしの思うに、鳥や虫がいなくなり始めたのは、それより3〜4ヶ月ほど前だったよ。その頃からおかしくなっていたんだな」

つまり、10ヶ月前。大雑把に、1年前つてとこだらう。例のKN興産が関つて来るのは、それからさらに2年前を遡る。

源蔵爺さんの話によると、3年程前、KN興産はこの辺りの一角の土地を信じられないような格安で購入すると、土地改良と称して色々な薬剤をその土地に投棄し始めたのだそう。確かにその時は、周辺住民もちよつとおかしいとは思つたらしい。でも、山林に囲まれてあまり産業も収入の当ても無いこの土地に、彼等は迷惑料という名目で、幾許かの金を落としていた。

そのほとんどは村への収入であり、それは老人ばかりのこの村の社会保障費と消えていった。また、村人の幾人かは、KN興産の雇い人となる事で、これまで以上の稼ぎを手にしたんだ。

「あん時や、わしも金が落ちるんならまあいいかあつて思ってたんだがよ」

人口も百人ちよつとくらいこの村で、KN興産の存在は大きかったようだ。源蔵爺さんも、つい2月前までは、彼等の事をほとんど気にはしていなかった。自宅の僅かな畠から取れる野菜を売って得た収入と、年金で静かに暮らす毎日だったんだそうだ。

そんな、源蔵爺さんが今のような事を始めるきっかけとなった事件が、3ヶ月くらい前に起こったんだ。

(8)

今から約3ヶ月くらい前の事だ。

源蔵爺さんの家には、東京に住んでる息子夫婦が二人の孫を連れて遊びに来ていた。数年前に、奥さんを亡くして、山村に一人暮らす爺さんにとつて、晩年に出来た一人息子と孫達に会うのは、数少ない楽しみの一つだった。

その日、爺さんは8才と5才になる孫達と連れ立って山に入った。上の子の『自然観察日記』のためだ。東京周辺からはほとんど無くなってしまった生の自然に接する機会は、孫達には滅多に無い事である。また、いつもは苦手なテレビゲームやビデオをせがまれる爺さんにとつても、山野の散策は名誉挽回の絶好の機会だったんだ。

その頃は、未だ今日ほどは荒れていなかった道をぶらぶらと散歩するうちに、爺さんが思いついたのは、さっきの原っぱに孫達を連れて行く事だった。そこは、先祖伝来の土地ではあったが、林業も廃れ、一時流行ったゴルフ場建設の波にも乗れずに、ここ二十数年の間手付かずのままに放っておかれていた場所だった。

「あそこはなあ、わしが女房にプロポーズした所なんだよなあ。女房もさあ、あそこが気に入ってよう、日に必ず一度は花畑を見に行ってたもんさ。そんでな、女房の死んだ時に、内緒で骨の一部をさあ、あそこに埋めたんだよな。ま、もつとも、それ以来一度も行ってなかったんだけどよお」

爺さんははつきりとは言わなかったんだけど、僕が思うに、孫達

に祖母の事を伝えようと思った訳ではなくて、奥さんに孫達を見せようという意図だったのかも知れないな。

「だけど、行ってみたら、かつての花畑は荒涼たる荒れ地になってしまっていた。これは爺さんにとって、シヨックだったに違いない。『わしゃあ、最初、わしがあんまり不義理なもんだから、女房が怒っちまったんだと思つたよ。情けなかつたね。それで、元通りとは言わないまでも、せめてわしの生きてる内には、ちつとはまじしように思つたのさ。ただ、それだけだったのに……」

それから、毎日、爺さんは荒れ果てた原っぱを手入れし始めたんだ。2人の孫も、爺さんに付き合つて作業を手伝っていた。

そんな彼等に異常が現れるのには、大して時間はかからなかった。作業を始めて3日後、下の子が皮膚や喉に異常を訴え、微熱が続いた。上の子や爺さんにも僅かながら兆候が見え始めていたそうだった。工業試験場の研究主任だった長男は、自分の息子の症状を見て、また、例の原っぱの状態を訊いて、これがただのアレルギーなどではない事に気がついた。そして、単独で調査をする内に、その原因を突き止めたらしいんだ。

「らしい」ってのは、その辺りの詳しい情報を爺さんが知らされていなかった、と言うよりも理解出来ていなかったからだけど、その元凶がどうもKN興産であるらしい所までは知らされていたらしい。

「わしがもつと息子の話をよく聞いてりゃ、あんな事にはならなかつたんだ、きつと。あいつは、前からずっと、『あいつ等のやつてる事はどうもおかしい』って言ってたんだ」

源蔵爺さんの息子が調査を始めてから、爺さん達の回りに人相の悪い連中がうるつくようになっていた。そして、何かと言っちゃあ文句をつけてきたり、嫌がらせをしてきたんだそうだ。爺さんは多分KN興産に關りのある者達に違いないって言ってたけど、おそらくその通りだろう。

勿論、爺さんも彼の長男も村や県なんかに訴えたんだけど、結局

取り合ってくれなかったそうだ。工業試験場を通じての照会もして
たらしいけれど、それすらも音沙汰なしのありさまだった。どう考
えても、何処かで政治的な圧力が働いているとしか考えられない。
その辺りを察知していた息子夫婦は、対策を立てようとしていたの
だけれど、結局間に合わなかったんだ。休暇を終えて東京へ帰る途
中に事故に巻き込まれて、彼等は帰らぬ人となった。

爺さんは、警察にもマスコミにも、これが単なる事故じゃなくつ
て、KN興産の仕業に違いないって何度も訴えたんだけど、誰も
聞いてはくれなかったんだ。

それ以来、源蔵爺さんは孤独な戦いを続けている。それは、ほと
んど効果の期待出来ない空しい戦いかもしれなかったけれど、それ
だけが今の爺さんの生きがいになっていた。

「多分、わしなんかこんな事をやってても、なんもかわらんのだ
ろうなあ」

爺さんは、うつむいてぽつりと呟いた。

でも、不思議な事がある。

「どうして、あなたは今まで無事だったんですか？」

父さんが、僕の代わりに訊ねた。

「ん？ 息子達のアドバイスでなあ、一寸した手品を仕掛けといた
んだよ。」

「手品あ？」

今度は僕が訊いた。爺さんは、僕に細くなつた目を向けながらこ
う答えた。

「わしの遺言書を書き換えたんだよ。わしが死んだら、わしの持つ
てるこの辺の土地全部を、国内外の環境保護団体に寄付する事にな
ってるんじゃない。ただし、完全な環境調査をして、全てを世界に公表
する事が条件じゃ。費用は全部わしの財産と保険金から払う事にな
ってるし、複数の非政府団体を指定してある。中には、やつらと対
立している組織の息がかかったところもあるに違いないさ。これな
ら奴等も迂闊には、わしを殺りに来れんだろうて」

なるほど。これなら、相手には結構なプレッシャーだろうな。あれ？ でも、だったら、さっさと死んじゃった方が得策と言うことにならないかあ。

「このわしの命をくれてやるのは最後の手段じゃ。どの道こんな事やってりゃ、そう先の話じゃなからう。ただ、出来ればわしの手で敵を打ってやりたいもんじゃがな」

源蔵爺さんは、お茶をすすりながらそう言った。

(9)

しばらくして、僕等は源蔵爺さんに別れを告げた。

そして、例の投棄場所とか言うところを目指していた。結局、お母さんはあれつきりなただけど、この際しようがない。ひよっとすると先に現場に行っているかもしれない。だって、他に面白そうなところ(勿論お母さんにとってだけれど)は、無さそうだから。

「もう少し先だな」

最後尾の父さんが言った。

父さんの「もう少し」は、あてにならない。自動車より速く歩く(！)ことの出来る父さんにしてみれば、100km先だろうが200km先だろうがもう少しである。ひよっとすると、まだまだ先かもしれないなあ。うんざりしかけた僕は、すぐ横の輝兄ちゃんの顔を見て、ちよっとだけ安心した。大分バテ気味のようである。

ウーン、よく考えたら、僕んちの人間で普通(?)なのは、僕と輝兄ちゃんくらいなんだ。

父さんは超人だし、おじいちゃんは仙人だし。お母さんに至ってはひよっとすると人類じゃないかもしれないしなあ。あっと、輝兄ちゃんは浪人で特撮オタクの変人だったけ。だとすると、僕だけなんだ、まともなのは・・・。

僕んちって、本当にこれでいいんだろうか？ よく、社会が容認しているもんだ。普通に考えたら、軍隊やらスパイヤらが嗅ぎつけ

て、押し寄せて来てもいいもんだけどな。何にもないって事は、それだけ世界が平和なんだって事だろうな、きつと。

その平和の何分の一かくらいを僕んちに分けてくれてもよさそうなもんだよな。なんてくだらない事をぶつぶつ考えていたら、ふいにおじいちゃんの声がした。

「ここのようにゃのう」

錆びだらけのフェンスの向こうには、さっきの野原と負けず劣らずの荒地が広がっていて、あっちこっちを数台の産業用サーボスレイヴが巨大なシャベルでひっくり返していた。時折、大型のダンプカーがやってきては、赤褐色の土砂のようなものを降ろして去って行った。

荒地地の遠くに二階建のプレバブが建っている。屋根の看板には『KN興産』の文字が読み取れる。

「ねえ、あれが毒の元なの？」

僕は尋ねてみた。

「俺には、普通の産廃にみえるなあ。焼却場からの灰なんかの」

輝兄ちゃんは珍しく真剣な目で意見を言った。

「さあて、どうじゃな？」

おじいちゃんは、父さんに意見を求めた。

「そうだな、・・・輝久君の言う通り、焼却灰がメインの産業廃棄物ってところだな。人畜無害とは到底言えないが、源蔵さんが言うようなものじゃないな」

「やっぱり、源蔵爺さんの思い違いなのかなあ」

「それは、どうかの。・・・さて、どうするね？」

「中に入って調べてきましようか？」

「輝兄ちゃん、それはまずいんじゃないの。だって、ここって私有地でしょう」

僕は近くに見える「立ち入り禁止」と書かれた看板を指差した。

「大丈夫だよ、こんなの」

輝兄ちゃんが、フェンスを乗り越えようとするところを、父さん

が止めさせた。

「ここを調べても、何も出てきはすまい。・・・、少し廻ってみよう」

「そのようじゃのお。やれやれ年寄りには辛い道行きじゃが、もうちつと歩いてみるかの」

おじいちゃんもそう言つて、フェンスに沿って歩き始めた。僕と輝兄ちゃんも、後をついて行った。

しばらく歩いた後、僕等は父さんの指示に従って、フェンス沿いの道から森の中へ進路を変えた。

「さっきの土地から遠ざかってますよ」

輝兄ちゃんが、僕に代わって訊いた。

「うん、地下水脈の流れからすると、むしろこっちの方だろう。臭いもきつくなってるしな」

臭いなんて僕にはわかんなかったけど、父さんがそう言うなら、きつとその通りなんだろうな。

僕等は、獣道のような道を、枯れ草をかき分けて進んだ。そして三十分も歩いたろうか、僕達は急に開けた場所に出くわした。周りにじゅうが枯れ木や枯れ草だらけなのは今までの荒地地とおんなじだ。そんな中に、100m四方くらいの空き地が広がっていて、丁度その真ん中辺りにバラックの建物が建っていた。その建物から右手方向に、やや広めの道が続いていて、轍の跡が何本も続いていた。察するに、あれが正式な出入り口らしい。

「ここかな？」

おじいちゃんが訊いた。

「ええ・・・。ですが、これほどとは。思ったより大規模です」

何が大規模なんだかよく分からないけれど、とにかくここが元凶らしい。

と言つても、建物と広場以外に何にもないんで、僕にはよく分からなかった。

「さて、もちつと近くで見物させてもらおうかのぉ」

おじいちゃんは呑気そうにそう言った。

「大丈夫ですかね」

「別に構わないだろう。フェンスで覆っている訳でもなし、立ち入り禁止の立て札があるでなし。そのプレハブにさえ入らなければ、特に不法侵入とも言えんだろう」

輝兄ちゃんは心配げだったが、父さんにこう言われて従った。僕達4人は、枯れ草や干からびた落葉の絨毯を踏みしめて、プレハブへ歩みを進めた。

すーばあお母さんとピクニック【4】

すーばあお母さんとピクニック【4】

(10)

草一本生えていない空き地の真ん中に、その建物はぼつんと建っていた。その代わりと言っては何だけれど、地面には赤茶けた落葉が一面に積もって絨毯の様になっていた。

写真を撮って誰かに見せれば、全ての人が『秋』を連想するだろう。そんなたまたまだった。

僕達は、落葉を踏み越えて、中心の建物に向かった。今朝までの大雨で湿気っている所為か、地面からは幾分異臭が放たれている。遠めにも貧相なプレハブの平屋は、あちこちに錆びが浮き出しているけれど、近づいてみたら、そんな見掛けよりは結構頑丈に作られているらしかった。数少ない窓にもシャッターが下りており、内部の様子なんかは僕には分からなかった。僕等のいるところから右手方向に出入り口があるはずだけれど、ここからは死角になっていてよく分からない。

耳を澄ますと、かすかにブツツという音が鳴っているのが分かるけれど、妙な事に僕には音源がこの建物の中じゃないように聞こえた。輝兄ちゃんは、何とかシャッターの奥を覗き見ようと四苦八苦していたけれど、僕には、それが何度も受験失敗を繰り返す輝兄ちゃんを象徴しているようで、何だか哀れに感じた。

父さんとおじいちゃんは、何だかぼそぼそと内緒話をしていたようだけれど、僕には上手く聞き取れなかった。時々、地面を指差したりしているのは、例の汚染の事かも知れない。

「そろそろかのう・・・」

おじいちゃんが咳くように言うと、父さんはそれに目で応えた。

輝兄ちゃんが窓から飛びのくと、扉があるだろう方向に身構えた。それで僕も、何か起こるんだなっていうのがわかった。僕は輝兄ちゃんの背中から、ここからは見えないドアを睨んでいた。

10秒・・・30秒・・・1分・・・何も起こらない。

いい加減、緊張の糸が切れ掛けていた時、不意に後ろから父さんが輝兄ちゃんの背中をつついた。

「へっ？」

僕は、惚けたように父さんの方を振り向いた。父さんは握り拳に立てた親指で自分の背後、つまり僕等が見ていたのと反対側を指差していた。ちよつと仏頂面をしている。

「はは、まいったなあ」

父さんの肩越しに、数人の男達が立っているのが見えた。ドアある方とは反対の側から出てくるなんて卑怯だよな。一見知能的な行動とは裏腹に、男達は揃いも揃ってチンピラの制服ともいえるような井出達をしていた。

中でも一番頭の悪そうなやつが、腰の特殊警棒を引き抜くと、

「よう、兄ちゃんたちい。あんたらあ、ここで一体なにやってんだあ。ここあ、ガキやジジイの来るとこじゃあないぜい」

と、ガムをくつちやくつちやさせながら言うと、こちらにしゃしゃり出ようとした。それを、先頭のサングラスが軽く左手を挙げて制止した。

多分、こいつがリーダーだろう。カーキ色の綿シャツに濃いグレーのジャケットを羽織っている。短髪にサングラスのこの男は、チンピラを卒業してヤクザの仲間入りをしたばかりと言った風情だ。もっとも、どっちも五十歩百歩だけど。

「すみませんなあ。ここは、私有地なんですわあ。一般の方は出て行ってもらえんでしょうか」

なんだかバカ丁寧にしよう和努力している様が、妙におかしくさえ思える。

「私有地ですか？」

父さんが応えた。

「はあ、そうなんですわ」

「それは知らなかったなあ。標識も何もなかったもんですので、つきり公共のものだと思いましたよ。県か何かのねえ」

最後の言葉に、サングラスが一瞬眉をひそめるのがわかった。

「どっちにしても、ここは立ち入り禁止なんですわ。はよう出てっ
てくれませんかおう」

「それなら仕方ないですが……。我々は道に迷って仕舞いまして、ようやくここに出てきたところなんですよ。一体どっちに行けばいいのや途方に暮れていたところですよ。それに、もう歩き疲れてしまつて。出て行くのはいいですから、しばらく休ませてもらえないでしょうか？ 子供や老人もいる事ですよ」

父さんは以上を如何にも棒読みといった調子でサングラス達に言つた。その後ろで、おじいちゃんがわざとらしく尻餅をつく、「いやもう、くたびれてくたびれて」と言いながら、水筒のお茶をちびりちびりとやり始めた。

遠目にもサングラスの頬が引きつってるのがわかる。気持ちは充分すぎるほどわかるけど、こんなんで切れちゃうのは、まだまだ小物の証拠だね。

「てめえら、下手に出てりゃあ付け上がりやがって！」

最初のガム男の方が先に切れた。

「おめえは、ひっこんでろ！ 何度言ったら分かるんだっ」

サングラスは一喝すると、

「すみません、御見苦しいところを。……ですがねえ、決まりは決まりなんですわ。御疲れのところ、申し訳ないんですが。ああと、ほれ、あっちが出口なんで」

そう言つて、道路とは反対側へ顎をしゃくつた。

「あっちには道なんてないですけど」

「心配はありやあしません。ちょびつとだけ歩いて貰えれば、直に登山道に出ますんで。……なんだったら、うちの若いモンに案内

させましようか？」

そう言うサンングラスの後ろで、チンピラ達がニタニタしていた。

「まあ、うちの連中は、ちいっとがさつなんばっかですんで、丁寧な道案内はでけんでしょうが、まあ、この辺は詳しいんで安心はできますよお。のう」

サンングラスもにいと口の端で笑うと、そう付け加えた。

「へっへっ、迷わず送ってやるぜい」

「どことはいわねえがよお」

「なんだったら、荷物も持ってってやるうかい」

さらに、野次がとんでくる。どうしてこういった類の奴等はこども品性下劣なんだろう。保健所で捕まえて、ちゃんと駆除しておくようにいっとかなきゃな。

「ああ言ってますが、どうします」

父さんは、その気もなくせにわざとらしく脅えたようにして、おじいちゃんに訊いた。

「やじゃよ。わしゃもう疲れたんじゃ。一步も歩けんわい。あそこで休ませてもらわんと、動けんわい」

「なんだあ、ジジイ。なんだったら、ジジイだけ置いてつてもいいんだぜ」

「老いぼれがいなくなって、せいせいするだろうなあ」

「またも野次が飛んだ。」

「年寄りを粗末にすると、バチが当たるぞお」

おじいちゃんが低い声でいうと、奴等の何人かの顔色が変わった。

「ばっ、八チって何だよ」

「老いぼれのいうことなんざ恐くねえぞ」

野次る声がやや震えていた。

「身に覚えのあるのもおるようじゃ。クッククツクツ、・・・恐いのかのう」

おじいちゃんの言葉に、ちんぴら達もシンと静まった。事情を知らない筈のサンングラスの顔にすら、冷や汗が浮かんでいる。

「・・・あ、あんましゴタゴタぬかしてると、痛い目をみるぞ。五体満足なまま帰れたかったら、とっとと出ていきな」

虚勢を張るように、サングラスが吐き捨てるように言った。ここに来て、地が出てきてしまったようだ。どこまで行ってもチンピラはやっぱりチンピラだ。

「出て行くのは別に構いませんが、そうまで言われると逆に何だか妙に聞こえますねえ。人に見られちゃ困るモンでもあるんですかねえ」

父さん、またも棒読みだ。サングラスのこめかみに血管が浮き出ている。あつ、切れるかな。

「さつき、ここは私有地との事でしたけれど、確かここは県の所有地の筈ですよ。そこに勝手にこんな建物を設えるのは違法じゃないんですかね」

「・・・」

お、耐えてる。結構、芯は強いのかな？

「しかも、違法建築だ。消防法じゃ、こんな部屋は許されてない筈ですがね」

そういうと、父さんは左足で軽く地面を2・3回叩いた。

「・・・てめえら、やっぱり、あんじじいのまわしもんだなあ」

サングラスが、絞り出すように言った。

「さあて、何の事でしょうか」

「とぼけるんじゃないねえ。ここへ向かってる時から妙だと思ってたんだ」

「ふうん、『ここへ向かってる時から』ねえ。どうやって見てたんですかね。不思議ですねえ」

「う、うるさい、そんな事はどうだっていい！ さつさと、出て行け」

「ほらほら、そんな言葉遣いじゃ、また叱られますよ。・・・ほら、いわんこっちゃない。行儀良くしないから。怒鳴り声がこつちにまで、聞こえてきました」

そう、父さんは人差し指で耳をほじりながら言った。しかし、勿論サングラスも誰も怒鳴った人なんていなかった。

「人が叱られるのを横で見てるのは、あんまり気分のいいもんじゃないですね。ねっ、羽山くん」

最後のはきつとサングラスの本名だろう。

「あのサングラスに、スピーカーとマイクが仕込んであるんだよ、きつと」

輝兄ちゃんが、そつと僕の耳元に近寄って小声で教えてくれた。

まあ、言われなくても、焦ってしきりにサングラスをいじってる『羽山くん』の様子を見れば、普通わかるもんだよ。

でも、羽山の連れはまだ飲み込めていない様子だ。きよとんとして、焦っている羽山を不思議そうに見ているだけだ。普通、そこまですり悪いかあ。もしかして、脳味噌つまってないんじゃないのかな。「まあまあ。ソレは壊れてないから。・・・おやおや、そんなに急がせるところを見ると、何か差し迫った用事があるようですね。例えば、大事な人がやってくるとか」

父さんはもう眼前の羽山とは話していなかった。

「凶星ですか。さあて、ならどうするんでしょうか？」

父さんの質問に応えたのは、羽山なのかそれともその向こうで指示している誰かだったんだろうか。

「・・・や、やっちなえ。おめえたち、こいつらを生かして帰すんじゃねえ！」

あまりに当然すぎる台詞を合図に、チンピラ達は僕等に襲いかかってきた。

(11)

「オレあ、さつきからうずうずしてたんだ」

こう言ったのは、この暑いのにダブダブの黒い皮ジャンを着込んだ男だった。その不自然な服の膨らみから、何か隠し持っているら

しい事が判る。

「おとなしく帰ってりゃ、痛い目をみなんだのにな。今更後悔しても駄目だい」

これは、最初にしゃしゃり出てきたガム男だ。言うなり、噛んでいたガムを地面に吐き出す。他の男達もニタつきながら僕等の方にゆっくり歩いて来る。連中は、リーダー格の羽山を除いて、7人。取り敢えずは素手だ。サングラスの羽山は、連中の後ろで傍観している。情報を伝える必要からだろう。

こっちの戦力は、老人1人と子供1人を含む4人。傍目には圧倒的に不利だ。奴等も当然そう思っていたに違いない。

「やれやれ、しょうがないな。・・・輝久くん、ちょっと手伝ってくれないかな」

父さんは、さもうんざりした様に輝兄ちゃんに言った。

「えっ、いいんですか!」

「何だったら、全部任せてもいいよ」

「わしも、手伝おうかい?」

「遠慮しときます。かえって不自然でしょう」

本当なら、父さん一人でおつりがくるのだろうけれど、輝兄ちゃんに助太刀を頼んだのは、適当なところで手加減するのが面倒だからだろう。極端に圧倒的な強さを見せてしまうと、サングラスの背後の誰だかを警戒させて仕舞うと言うこともあるに違いない。かといって、適度な強さに加減するのは、高層ビル解体用の巨大鉄球で生玉子をつぶさず、殻にひびだけを入れようとするようなものだ。父さんには辛いだろう。

残念ながら、今回おじいちゃんは見学だ。喧嘩の強い老人と言うのも目立ってしょうがないものね。僕も戦力外だからパス。

と言うことで、父さんと輝兄ちゃんが、僕達の代表と言うことで前に出た。

「庄クン、ちょっとこれ持ってよ」

輝兄ちゃんが上着を脱いで僕に渡した。

「輝兄ちゃん、やる気万々だね」

「うん。たまにはいいところを見せないかね」

「そうだね。見るから頑張ってるね」

「おう、任せとき」

そう言つて、輝兄ちゃんは肩を回しながら進み出た。

輝兄ちゃんの強さは、以前のコンビ二強盗事件で実証済みだ。(残念ながら相手が人間じゃなかったから勝負には負けちゃったけど)その辺のチンピラなら、何人でかかってこようと相手になるはずがない。もつとも、素手でという条件付きだろうけど。

「へへっ。後悔すんなよお」

「お手柔らかに」

父さんが言つたのはチンピラ達ではなくて、ひよっとすると輝兄ちゃんにだったかも知れないな。やりすぎるなよ、って事だろうな。

まず、先頭の二人が父さん達に殴りかかってきた。全員で来ないのはなめている証拠だ。彼等が拳を繰り出そうとした次の瞬間、二人は地面に這いつくばっていた。実際には殴りかかるうとしたところを、父さんに『軽く』はたき落とされただけなのだが、あまりに一瞬の出来事なので、傍目には彼等が空気にも踏みつぶされたように見えるのだ。当事者にしても、何が起こつたのか分からなかつたに違いない。

「? て、てめえ、・・・よくも、やりやがったな」

一人は落葉の切れ端を、顎にぶら下げながら立ち上がろうとしていた。もう一人は、そのまま地面の上でうめいている。一方の父さんは、しまったと言う顔をしていた。本当は一発ぐらい殴らせるつもりだったらしい。ちよつと肩をすくめると、

「後は任せていいかな?」

と、輝兄ちゃんに言った。

「いいもつ」

言つたり、輝兄ちゃんは起き上がり掛けたのを踏みつけざま、残り5人の集団の中に飛び込んで行った。

「てんめえ、よつくもやりやあがつたなあ！」

罵声をあげて、5人のチンピラが迎え撃った。

「とおっ」バキッ

「たあ」ボグ

「どりやつ」メシ

「おりゃ」ドカ

流石輝兄ちゃんだ、一人に一発ずつ、合計4発で4人がその場に沈んだ。

「きさまあ、よくも・・・」

最後に残った皮ジャンが、懐から何か取り出そうとするより速く、喰らえ！ 今っ、必殺のをっ、ナツクル・バスター！」

が、決まった。と言つても、結局はただの右ストレートなんだけどな。どうにかなんないかね、あれ。

「わーはーはー。どうだあ、参ったかあ」

普段は下っ端として虐げられている所為か、はたまた久々にストレスを発散させられた為なのか、輝兄ちゃんは右手を高々とあげてVサインをしていた。

「どう、どう、庄クン。格好良かったらろう？」

誇らしげに訊く輝兄ちゃんに合わせるため、僕とおじいちゃんは「うんうん」と相槌を打ってあげた。

「あのなあ、・・・もちつと手加減してやれよ、かわいそうに」
父さんが、額を掌で押さえながら言った。

「ちゃんと手加減してますよお。行動不能にただで、意識は残してるじゃないですかあ」

そう言えば、最初に踏みつぶされたのも含めて6人とも地面でうめいていた。

「いてーよ、いてーよ」

「あ、あにきい、たすけてくれよお・・・」

「うえ、いてー」

うん、確かに気絶するほど殴った訳じゃないけど・・・

「だから、それがかわいそうなんじゃないか。君ならちょっと当身を入れるだけで、簡単に気絶させられたろうに」

父さんの言う通りかもしれない。いつまでも痛い思いをさせるよりも、気絶させる方が親切なのかもしれないな。

「こいつらにそこまでしてやるなんて、まっぴらですよ」

輝兄ちゃんは今朝の奴等の態度も含めてよっぼど頭にきていたらしいな。でもねえ。

「でも輝兄ちゃん、それじゃあ弱い者いじめだよ」

「ええっー。庄クンまでそんな言い方するのかい。ひどいよ」

「まあまあ、いいんでないかい。それよりも、いつまでもあやつをほったかしにしては、それこそ『かわいそう』じゃないかい」
あつ、そうだった。うっかり羽山くんの事を忘れるとこだった。

「そうそう、こいつね。・・・ねえ、どうします?」

輝兄ちゃんは、羽山くんの方をチラチラ見ながら訊いた。

当の羽山くんは、さっきから何も言えずに立ちすくんだままだった。冷汗まで滴らせているのは、彼我の力の差を思い知ったためだろうか?

「道具があれば何とかなると思ってたかい?」

おじいちゃんが言ったのは、今、羽山の口の端からボロボロとこぼれ落ちている銃弾の事なのかもしれない。

「胃袋の中に直接突っ込んでやってもよかったんじゃないやがのう。クツクツクツ、それじゃああんまり『かわいそう』だしな。わしも『弱いものいじめ』はしたくないし。・・・のう、庄坊や」

そうは言われても、おじいちゃんのやってる事も輝兄ちゃんに負けず劣らずの弱いものいじめだと思っぞ。僕の考えを知ってか知らずか、おじいちゃんはつかつかと羽山に近寄ると、奴を下から見上げながら言った。

「さあて、わしの言いたい事は分かっとなるかな」

羽山は答える事は出来なかったが、必死の形相で首を縦に振っていた。

「わしはなあ、もう歩き疲れとんのじゃ。休ませて欲しいんじゃが。……よろしいか？」

おじいちゃんは、飽く迄も優しく言っていたが、羽山にとっては拷問に等しかったろう。自分の常識の範疇を越えた何かに立ち向かうには、彼はあまりに無力だった。虎の威を借りて乱暴を働くしか能のない奴には、そんな気さえ起きなかつたに違いない。

「どうせ、中の奴にはバレバレなんですから、こんなのはササッと始末して、押し入っちゃいましょうよ」

輝兄ちゃんが物騒な事を言った。羽山の顔色が変わる。

「輝兄ちゃん、それじゃあ、どっちがヤの付く人かわかんなくなっちゃうじゃないか。もうちょっと、穏やかに出来ないかなあ」

「ま、そりゃそうだな」

「え〜。そりゃないですよ。いっつも俺ばっか悪者にされるんだから……」

輝兄ちゃんは、とうとういじけてしまった。ちょっとかわいそうかな。

「まあまあ、今回は輝久君も頑張ったんだし」

父さんがとりなしたが、輝兄ちゃんはやっぱり未だいじけている。

「……ま、少なくとも、そこの彼が用無しなのは間違いないな」

「え？ どういう事」

僕が父さんに訊いた瞬間、幾つもの銃声が鳴り響いた。

「つまり、こう言うことさ」

事も無げに答える父さんの左手の先には、ついさっきまで羽山だった肉のカタマリがぶら下がっていた。

すーばあお母さんとピクニック【5】

すーばあお母さんとピクニック【5】

(1 2)

問題1 気絶するほど殴られるのと、気絶しない程度に殴られるのと、どっちがかわいそうなんだろうか？ きつと、どっちもかわいそうなんだろうな。でも、今の羽山と較べたら、まだまだましな部類だろう。

僕等を追い出すのに高々10分ちよつとくらいしか掛かっていないのに、役立たずと思われるのは心外だったかも知れない。

「君も最期には役に立ったんだから、いいんじゃないかな？」

と、父さんに言われたところで、全身スタボロ、無数の銃弾を身に受けて、白目をむいたまま泡をふいている彼には、何の慰めにもならないに違いない。

「一応、急所は外しといたから」

銃弾避けの盾にしろといて、こうい言う方はないかも知れないが、一応命はあるみたいだ。もっとも、彼がボロボロになったのは、ばら撒かれた銃弾を受け止めるために、超スピードで振り回された為の方が大きいんだけど。

ここで問題2、一発で楽に殺されるのと、穴だらけになっても命があるのではどっちがましか？ 父さんは後者を選択させた（と言つより押し付けた）のだけれど。

「ほれ、これは返すよ。今度から、採用試験と社員教育には、もっと気を配った方がいいと思うよ」

そう言つと、父さんは血だらけの羽山を放り投げた。

「別にそいつらは、うちの社員でも何でもなし」

冷淡にそう言ったのは、この上天気いきつちりと黒の三揃えのス

スーツを着込んだ男だった。御丁寧に頭もテカテカのポマードで固めてある。

その後ろには、これも黒の背広と白いYシャツに、きつちりとネクタイを締めた男達が揃っていた。一見サラリーマン風にも見えるが、手にしているのはスーツケースでも書類鞆でもなくて、サブマシンガンだった。

「じゃあ何だ。アルバイトか？ それとも出入りの業者か？」

「下請けだ」

重ねて訊いた父さんに、スーツの男はこう応えた。

「下請けが勝手に契約範囲外の事をやったのを、とやかく言われたくないものだ」

「どこまでが、契約範囲内だったんだ？」

「10分以内に君達をここから退去させる事までだ。ケンカをしろとも休ませていいとも言っていない」

「ふむん……。で、10分経つたんで、契約不履行と言う訳じゃないな」

これは、おじいちゃんだ。

「んでもって、これからは、あんたらの業務という訳じゃな。……ちなみに、後ろのは正社員かな？ それともアルバイトかい？」

うんうん、それは僕も興味がある。給料いくらくらいなのかな？

もし、父さんの月給より上だったら、転職を考えてもらってもいいかもしれないな。

「今は、うちの社員だ。だが、必要な時にはいつでもクビに出来る」
ひ、ひどいなあ。鉄砲かついで命がけの仕事しても、いざとなったらトカゲの尻尾切りかよう。やっぱり、転職の話は無しだ。

「では、改めてお願いします。当方の敷地内から取り急ぎ、退去してもらおう」

「そんなんで脅されて、はいそうですかと、言うと思ってたのかい」
「やはりな……。では、来なかった事にしてもらおう」

と言うと、男はすっと脇に退いた。それを合図に後ろの黒服集団

が、一斉に進み出ると、銃口を僕等に向けた。

「やれやれ。・・・さて、どうします？」

父さんは、さも困ったようにおじいちゃんに訊いた。

「やらせとけばいいんじゃないかい」

これが、おじいちゃんの答だった。

僕等の会話を聞いてか聞かずか、黒服達は無表情のままだ。

「やれ・・・」

三揃えが低く命令した途端、男達の銃口が一斉に火を噴いた。
タタタタ・・・

という微かな軽い音と共に僕等の後方の木々に、次々と小さな穴が穿たれていったが、それも2・3秒くらいで終わると、男達の半数が鮮やかな手つきでマシンガンの弾奏を入れ替え始めた。別に弾切れでも何でもない。最初の1秒で効かないとわかったのだ。

グリップから、未だ弾の残っているカートリッジを抜き去ると、寸時に新しい弾倉をたたきこむ。それと同時に、銃身の前方にある留め金を緩めて、突き出たサイレンサーを切り離れた。見る間に銃には新しい弾が込められ、発射を待つばかりだった。その間約3秒。残りの半数は、既に換装を終えている。全員一度行わないのは、隙を作らない為だ。実によく訓練されている動きだった。薬室に新たな初弾を送り込む音が聞こえるや否や、第二段がお見舞いされた。銃口が光ると同時に、ドーンという大きな音がした。それも、僕達の後ろから。それと同時に、森の木々が幹を粉々に砕かれて倒れ始めた。既に朽ちているとはいえ、どれも直径は30cm以上はある。

「炸裂弾かい。無茶をするのう」

本当だ。僕等に当たったらどうするんだよ。粉微塵に吹き飛ばんじやうじゃないか。だけど、しばらくすると、その爆発が僕等の周辺で起こるようになった。僕等のまわりの、何もない空中で。

「MM15-C、AI起爆真管か」

「学習型ですからね。銃の方の本体プロセスで計算しているとは

いえ、随分爆発が近づいてきましたね」

輝兄ちゃんの言う通り、小爆発は僕等の周囲に集中して起こるようになってきた。

「じゃが、直撃しなくては意味があるまい。ククク・・・」

「ま、その通りですけどね」

そう、プロフェッショナルの至近距離での射撃にもかかわらず、一発も僕等には直撃していないのだ。たとえ弾道が直撃コースであっても、爆発が起こっているのは僕等の前後である。

「・・・」

何を考えているのか、黒服達の親玉は無表情でじつと押し黙ったままだった。それ以上にブキミなのが、鉄砲持つてる正社員(?)達だった。一糸乱れぬ正確な動作もさることながら、こいつらも親分の三揃えに負けにくいらい無表情だった。一瞬アンドロイドかな? っていう考えがよぎったけれど、体格も顔の造作もそれぞれに違っているから、少なくとも安物の量産品ではないだろうし、こんな田舎ヤクザが高級品を使えるとも思えないし・・・。

そうこうする内に、三揃えがさつと右手を上げた。その瞬間に、銃撃が止んだ。辺りに、はっとするような静寂が戻ってくる。

もう諦めたかな? と、思う間もなく、三揃えは上げている右手の指をパチンと鳴らした。その途端に、目の前が一瞬光って真っ暗になった。

(13)

「おわっ!」

ドンと言う衝撃は、後から襲ってきた。一瞬、僕には何が起こったんだかよくわからなかった。黒服集団の三揃えが指を鳴らした途端、僕等は大爆発の真っ只中にいた。辺り一面には、黒々とした靄が硝煙の臭いと共に漂っている。

「迫撃砲かい。無茶をするのう。わしでなければ、皆諸共だぞ」

「はっ、迫撃砲お〜！」

何て事をするんだ。こんな距離で使ったらへたすると、いや、普通だと間違ひなく共倒れだよ。回りはまだ爆煙と土煙でもうもうとしている。

「戦争でもしに來たつもりかのう。善良な一般市民にやることじゃないぞい」

言ってる事はもっともなんだけど、おじいちゃんが言うところとギヤグにしかない。

「なるほど・・・、やはり只者ではなかったな」

もう、大分薄くなってきた煙の向こうから、例の三揃えの影が眩くように言うのが聞こえてきた。だけど、ここまでしなきゃわからんことかあ？ やりすぎだぞ。

「空間歪曲能力・・・、いや、むしろ空間転送に近いのか。さっきの爆風も、上空か何処かに転送したな」

「ほっほう、ようやっとわかってきたかい。さっきのヤー公よりはちいっとばかり、おつむの出来が良さそうじゃな」

そうなんだ。離れた空間を自由に接合したり切り離したりして、瞬時に物質を転送する能力。これが、おじいちゃんの特長能力だ。持って産まれたものなのか、修行で身に付けたものなのか、この能力のおかげで僕等は今両足を地面につけていられるわけだ。

いまの奴等の銃弾も、僕等の回りに張り巡らされた接合空間をパイパスして、あたかも僕等をすり抜けたかのように通り過ぎてったのだ。勿論、羽山くん達に当たったバチも、この能力を使ったものだ。ただ、おじいちゃんの場合、ハンパじゃないのは、相手から僕等がちゃんとまともに見えているって事だ。普通は、空間を歪めたりすると、光も空間に沿って歪曲してしまうので、今の僕等のような状態の場合じゃ、後ろの木が見えちゃうんだよね。

「もう一人、そっちはBBHか？ だが、私の部下を苦もなく倒したその力。並みのBBHとは考えられん」

僕等の足元には、何人もの黒服達が倒れていた。迫撃砲の爆煙に

紛れて襲ってきたには違いないが、必然的に父さんに振り返り討ちにあつたらしい。もつとも、僕は全然気が付かなかったんだけれど……。

「何とも恐ろしい奴、……貴様、BBSだな」

もう、随分と晴れてきた土煙の中に立っているのは、三揃えだけだった。恐ろしい事に、彼の足元にも、黒服達が何人も倒れていた。一瞬の隙を突いて『しかけた』のは、奴等だけじゃなかったんだ。あの一瞬の爆発の中で、一体どんな攻防が繰り広げられたのか、倒れている黒服達は、ピクリともしない。

「さて、何の事かな？」

あくまですつ呆けてる父さん。

「呆けるなよ。こつちだって、BBHの精鋭部隊だったんだぜ」

いつの間にか、三揃えの口調が、何だか親密なものになってきている。もしかしたら、この男も同類か？

「はてさて。BBHとは、ちよつと穏やかじゃないなあ」

BBH (Bio Boosted Human) : 生体強化人間。近年のクローン技術とサイバネティクス的发展によつて、事故や病気で手足や内臓の一部なんかを損傷した人達を、生体/死体からの移植に頼らずに治療する事が可能になってきた。そうやって治療された人達の中に、ごくたまに、普通以上の筋力や持久力・反射速度を得てしまった人達がいたんだ。BBHとはそんな人達の総称だ。

もつとも、最近は健康体であるにもかかわらず、スーパーマンになりたくて手術を受ける人達も大勢いる。勿論違法だ。この黒服達もそんな違法BBHなんだろう。ヤクザの精鋭ならさもありなん。

では、常人の何倍ものパワーを持っている、しかも戦闘訓練を受けたBBHを一瞬で倒して仕舞う父さんって一体……。

その答の一つが、BBS (Bio Boosted Soldier) : 生体強化兵だ。BBHを軍事用にチューンナップしたものだつて一般には伝えられているけれど、BBHに比しても桁違いの戦闘力

はそれ以上に特別な処置がなされているのもっぱらの噂だ。父さんもその一人なんだろうか？

「まだ、呆けるのか？ まあいい。私だって、超人を一度に二人も相手に出来るなんて思ってやしないさ。そこで、ものは相談なんだが、・・・」

「何じゃな？ 話によっては乗らんでもないぞ」

「おじいちゃん！」

「くつくくつ、いいではないか。聞くだけ聞いてみても」

「もう・・・」

能力だけじゃなくって、こういうところも常人離れしているんだから。僕なんか、か弱い一般人なんだぞ。強い方が弱い方をいたわるのが、筋ってモンじゃないかい。

「他でもない。私の役目はこの施設の護衛なんだが、見ての通り部下はもう使い物にならない。それで、代わりがいる。別に正社員として四六時中詰めてもらう必要はないんだ。ヒマな時とかに、ちよちよと私たちの仕事を手伝ってもらっただけでいいんだ。勿論、報酬は充分に出すつもりだよ。まあ、ちよつとしたアルバイトだと思っ
てくれ」

「さつきとは随分と態度が違うな」

「仕方ないだろう。それだけ貴様達の力を認めてるって事だ。それに、・・・」

「それに、時間も無いってことか」

「だな。後、数分でうちの社長がお客さんを連れてくるんだ。失礼があつちやならないから、貴様達は邪魔だったんだよ。それが、この様だ。仕方ないだろう？」

「同情するよ。だがな、もし私がお前の言うようにBBSだとして、こんなところへ何しに来てると思う？ 国かどこかの調査員とは考えないかい？」

「そうだな。だとしたら、交渉は最初から決裂している。だが、そ

れは無しだ。そう言った類の機関が動いている情報は入っていない。そもそも正規のBBSが、こんなところをウロウロしている訳がない。ホンモノのBBSってのは、そんなに暇じゃあないんだよ。どうせ、貴様もヤミで調製された違法BBSか、さもなければ脱走兵だ。どっちにしても、大きな声では言えまい。悪い話じゃないだろう」

「ふむ。考えとくよ」

「出来れば、今、答えを出してくれないかな」

「時間切れという訳か」

「そういう事だ」

父さんの言葉が終わるのに合わせたように、広場に入る道の彼方から、エンジンの音が聞こえてきた。

すーぱあお母さんとピクニック【6】

すーぱあお母さんとピクニック【6】

(14)

結局、父さんと三揃えの交渉は時間切れとなった。何の事はない、彼の言うところの社長様御一行が到着したからだ。

広場への道　　と言っても、単にそこだけ落葉が積もってなくて、地面が剥き出しになってるだけなんだけれど　　に、黒塗りのリムジンが二台入って来た。

続いて、その後から泥まみれの産業用サーボスレイヴが、ズシズシと足音を響かせて進入してきた。薄汚れた機体には、そこだけ銀色に光っているエンブレムがはり付いていた。『MEDACHI ISS-025M』、言うまでもなく、目建重機の主力機、SS25型『大五郎』だ。全高3.9メートルと比較的小型のボディながら、コクピットや操作系を思い切って簡略化し、コストダウンとイージー・メンテナンスを実現した名機だ。【普歩免許】で運転出来る割にはきびきびと反応し、また1200馬力とこのクラスとしては高出力で、さらに、背面カーゴ・キットや溶接アーム、切断アームなどの各種アタッチメント・オプションが豊富に揃えられているため、建設・土木作業や運搬作業、建築物解体作業から農作業分野までの、各種産業で使われるヒット商品となった。

一昨年からの発売だが、その基本設計の良さから現在まで4回のマイナーチェンジを経て、産業用汎用サーボスレイブのスタンダードとなっているが、眼前のこの機体は、どうやら初期モデルのようだ。全体の汚れもさることながら、両手足の各所に凹みや傷がある事から、相当に使い込まれているらしい。その割りには、とても

滑らかな動きをしていた。流石に自衛隊の『The A der』や『The B der』シリーズにはかなわないが、とても民製機とは思えない動きだ。これもヤミで改造でもしてあるんだろうかね？

『大五郎』を先導(?)してきた2台のリムジンは、プレハブの手前、僕等の位置からは10メートルくらい離れたところの空き地に並んで停まった。三揃えが素早く近づいていくが、僕等は知らぬ振りをした。奴がどんなに叱られたって知った事じゃない。

リムジンの回りは、いつの間にか黒服の集団が取り巻いていた。えーと、ひいふうみいの・・・僕から見える範囲では、5人は確認出来た。大型リムジン2台なら、無理をすればこの人数も収容は出来そうなのだが、実際には車のドアはこれから開かれるところだ。一体どこからやってきたのか不思議である。プレハブの中から？

そうかもしれない。でも、プレハブからリムジンまで彼等が移動するのを僕は確認出来なかったし、三揃えがこの護衛の責任者なんだから、たぶん、奴等はリムジンに付いてきたんだらうなあ。まあ、普通に考えて、三揃えの同類、ヤミBBHだらう。だとしたら、父さんのように自動車よりも早く歩けるのかもしれない・・・。

「おい、これはどういうことだ！」

僕を現実に戻したのは、この野太い罵声であった。その人物は、今しがた開け放たれたリムジンのドアから出てくるところだった。プロレスラーのようなごっつい上半身に五分ガリ頭が乗っかっているのが、ここからでも見て取れる。さらに続いて現れた片足は相撲取りのようであった。立ち上がれば身長2メートルは下らないと見える、この大男が奴らの親玉だろうか？ 巨人のような体格の大男には、大型リムジンの出口も狭苦しく見える。

「これは何の騒ぎだ。あいつ等は何なんだ、一体」

ようやく、リムジンを降りた男はすつくと立ち上がると、三揃えを“見上げながら”こう言った。

「申し訳ありません！ 社長。これには事情が有りまして・・・」

三揃えの方は、さも申し訳なさそうに社長を“見下ろして”言った。それも気に入らなかつたのだろう、さらに大声で怒鳴りつけた。「いいわけなんぞいらん。さっさと何とかしろっ！」

何なんだと聞いといて理由は聞く耳もたんなんて、そうとう理不尽だけど、気持ちは解るなあ。僕が社長でも、きつとおんなじ事言ってるよ。かといって、三揃え君に「はい、そうですか」と、僕らが何とかされる訳にはいかないんだけど。

それにしても、この社長は何なんだ。でかい頭、太い腕、たくましい胸、大木のような脚。上半身だけとか、足だけとかを見れば、それなりに巨きいだけで、むしろ理想的とさえ言える体軀をしているのに、胴体の部分が上下につぶれているので、一見すると胸からすぐ下の部分に直接足が生えているように見える。今になって考えると、服の中身はいつたいぜんたいどうなっているのか不思議である。ただ、実際この時には、そんなことよりも大爆笑しそうになるのを抑えるので、精一杯だった。

「まあまあ、そうどならんでも。なかなか面白い余興じゃないかね」と、こうとりなした声は、リムジンの向こう側から聞こえた。

これはごく普通の恰幅のよい胴体に乗っかっているのは、やや薄くなったごましお頭だったが、僕にはその顔がどこかで覚えのあるように思えた。どこで見たんだっけなあと、思索している僕の思考を遮ったのは、父さんと輝兄ちゃん言葉だった。

「どうしておまえがこんなところにいるんだ！」

(15)

『環境には人間の心が映し出され、人間の心は環境に影響を受けるのです』

これが、衆議院議員 守本吉則のモットーだそうだ。一昨日も、テレビの対談でキャスターにそう言っていた、まさにその本人の顔がリムジンの向こうに見えている。

「どうしておまえがこんなところにいるんだ！」

そう叫んだ、輝兄ちゃんの視線の先は、しかし、件の衆議院議員殿を指してはいなかった。

「久しぶりじゃのう、葵君。こんな所で逢うなんて、奇遇奇遇」
って言われた輝兄ちゃんは、齒を食いしばって声の主を睨みつけていた。

「きつ、貴様なんか、未来永劫、金輪際、会いとうないわい！」

どういう訳だか知らないけど、輝兄ちゃんと御手洗のおじいちゃんとは犬猿の仲だ。二人とも似たような趣味なのになあ。もっとも、輝兄ちゃんが一方的に嫌ってるだけなんだけどね。御手洗のおじいちゃんは、二台目のリムジンを降りて、僕等に向かってにこやかに手を振っている。だけど……

「どうしておまえがこんなところにいるんだ！」

父さんすらそう叫ばした主は、環境問題専門家の議員殿でもヒーロー大好きのお老人でもなかった。父さんの睨みつけるその先にいたのは……

「はあい、ダーリン。」

にやけている衆議院議員の隣で、ピンクのブルゾンが脳天気な手を振っていた。

「よりよって、何でこんなやつらと一緒にいるんだ……」

呟く父さんの隣で、おじいちゃんが苦虫を噛み潰していた。

「おやおや、お知り合いですかな？」

議員殿に訊かれて、

「ああ、見ず知らずの方々ですわあ」

って平気で答えるなんて、いったいどういう神経してるんだ。

「お母さん、何でこんなところにいるんだよお？」

「別にいいじゃない、そんなこと。たまたま、途中で会ったんですわねえ、センセ」

「そうそう、いやあ、全くの偶然ですな。はっはっはっあ！」

う、嘘だ。嘘に決まってる。BBHのガードが始終付きまどって

いるのに、偶然なんてあるはず無い。きっと何かやらかしたんだ。絶対そうだ。そうに決まってる。

「んでもって、あんたはどうしてこんなところにいるんだよ」

これは、輝兄ちゃん。

「ぬはははは。いやあ、たまたま、偶然に出会ったのう」

「うっ、嘘付けえ？こんな忍者みたいなガードが取り巻いてるのに、あんたみたいに得体の知れないじじいが、代議士と一緒にの車に乗ってられるかあ！」

「いいじゃん、別に。ほれ、その御仁が難儀してるようなんで、ちいつと手助けしたまでじゃよ」

「へへへ、いやあホントに助かりましたぜえ。こいつがぶっ倒れてどうにもならなくなった時には、どうしようかと思いましたが」

『大五郎』に乗っていた壮漢は、泥で汚れたボディーを軽く叩きながらお母さんの方を見やった。

「そのの姐さんが、ちよいとついでにくれただけで、新品みたいにすんなり動いてくれてねえ。・・・ああ、もちろん、もげちまった足をつないでくれたのは、爺さん、あんただけどなあ」

「つないで修理しただけではないぞ！新たに超カッコいい機能が付け加わっておるのぢや。その機能とはなあ・・・、知りたいじゃろう？ なな、知りたいじゃろう、葵君」

「ええいつ、そんなの知りとうないわいつ！」

「ホントかのう。本心からそう思ってるのかなあ。ほんつと〜〜〜」
「につ、超カッコいいんじゃないぞー。のう」

最後の『のう』は、サーボスレイヴのパイロットに向けたものだ。

「まっこと、その通り。ありやあすげえな。なんせ、ガーときて、ビュンとなつて、最後にガツキンなんだからな」

「これこれ、グオー、ガキガチャが抜けておるぞ」

「あ、そうそう、グオーときて、ガキガチャとなつて最後にガツキン！」

「どうだあ、カッコいいだろう。知りたくなってきただろー。」
「って、身振り手振りですらなくても、なんのこっちゃ訳わかんないんだけど……。」

「うづ……、ガーときて、ビュン。……最後にガツキンとは……。御手洗博士、おそろべし……やはり侮れん奴……。」

「ええっ！ 輝兄ちゃん、まさか知りたくなってきたなんてことはほうれほれ、知りたいだろう。知りたくなってきた、知りたくなってきたじゃろ……。でも、教えてやらないよ。秘密だもんねえ。」

「そうそう、企業秘密つてやつでさあ。」

「なっ、何でだようっ！ さっきは教えたがってたじゃないかあ。」

「お前なんかに教えてやらないよあ……だ。」

「……こ、子供の喧嘩だ。輝兄ちゃん、自分までレベル下げるとないのに……。」

「かわいいお子さんですなあ。だが、この辺をうろろろするのは、良くないんだよあ。」

そこへこう切り出したのは、KN興産の社長だ。口調はやさしそうなのだが、この風体と声音で言われると、小さい子ならひきつけを起こしかねない。社長のとなりでは、例の三揃え君が、眼の回りを大きく紫色に腫れあがらせている。

「まあまあ、そう言わんと。なあ、奥さん。」

議員殿がとりなそうとするが、納得が行かないようだ。もっとも、その議員殿も、本気で助けしてくれる気は無いらしいのだが。

「いや、やはりお仕置が必要でしょう。」

「いいじゃないですか、これくらい。帰る時に忘れてくれればいいことでしょう。ねえ。」

うづ、とうとうそうきたか。記憶操作されても、うれしくなんか無いぞ。

「別に、来なかったことにすることも、いなかったことにすることも出来ませんがねえ。」

「・・・しゃ、社長。先ほどもご報告申し上げたように、彼らにそんなことは無理です。それに、宗像常務がいらっしやっただなら・・・」

巨大な手で、顎を、いや顔全体を握りしめられて、三揃えはその場で悶絶していた。いかに、上下関係があるとは言え、BBHを素手でねじ伏せるなんて、とんでもない怪力だ。

「ふ〜ん、とっても素敵ね、それって。でも、どうせなら、お仕置きしてからの方が面白いかもよお。ねっ、センス」

「おやおや奥さん、構わないのですかな？」

「やっぱりねえ、女って強くて力があつて、お金があつて、権力もある男のの方に引かれるのかしらん、ねえ」

最後の『ねえ』は、父さんに向けたものだが、議員殿も社長も鼻の下が10cmくらいのびてて、その辺はどうでもいい状態だ。こんな中でも、一応は人妻なんだけどな。それにしても、ホントに何考えてんだよ、お母さんはあ。信じらんない。

「ねっ、どうせ、最後に頭の中いじるんだしい」

「そうですねあ、奥さん。どうだね、海道君」

「先生が、そうおっしゃるなら・・・おい、おめえら」

「さらさら、何か話がやばい方向になってきた。海道社長（って言うよりもヤクザの親分って言う方が相応しいんだけど）の一声で、2台のリムジンの回りに控えていた黒服達が、一瞬その姿を霞ませるとの、僕らの回りに現れるのとは同時だった。流石、特注BBH。

てな感じで悠長にしてられるのも、こっちには父さんとおじいちゃん控えているからだけだね。残念ながら、ここまでのレベルでは、さすがに輝兄ちゃんも戦力外。僕と二人で高みの見物ってところかな。傍目には、あわや絶体絶命って状況のこの時、

「ちよつと待ったあああああああ」

の聲がかかった。

すーばあお母さんとピクニック【7】

すーばあお母さんとピクニック【7】

(16)

僕達がBBHの集団に囲まれてしまっても、父さんもおじいちゃんも、僕や輝兄ちゃんですえ平然としていた。実際、何の問題もなかっただろう。この声がかかるまでは……。

「ちよつと待ったああああああ。」

の叫び声は、2台目のリムジンの向こう、産業用サーボスレイヴ『大五郎』のコックピットから響いてきた。ついさっきまで御手洗のおじいちゃんのすぐ傍にいたのに、いつの間に乗りこんだのか、既に操縦システムを装着している。サーボスレイヴの操縦システムは大型の軍用から超小型のマイクロサーボスレイヴまで、パイロットの身体の動きをそのまま再現するため、全身にメカニカルセンサーを装着しないとならない。如何に簡略化された産業用にしても、この早さは尋常じゃないよ。もしかして、こいつも……。

「おやっさん、どうせなら、俺にやらしてくんなよう。その方が、余興としては面白れえぜえ」

「ばかやろう、社長と呼べと言つとるだろうが。しかしまあ、確かにその方が面白そうだなあ。……どうです、先生」

「あたしも、それに賛成。だって、折角直したんだもんねえ」

「ふむふむ、じゃ、ちよつとやらせてみたまえ」

「おっし。おめえら、奴らが逃げられんように、周りで見張ってる。辰っ、おめえの好きなようにしな」

「ありがてえ。恩にきます、おやっさん、……じゃなかった、社長」

そう言うなり、サーボスレイブは滑るように僕らのすぐ目の前、3mくらいのところにやって来た。その間、2.5秒。やはり産業用とはとても考えられない早さだ。

「ねえダーリン、カツコイイところ、見せてねン」

これは勿論、父さんへなただけだ。いくらチューンナップされてるとは言え、機械人形ごときが父さんにかなうなんて到底考えられない。結果がわかりきってる事もあって、父さんはやりたくなさそうだ。

「こんな無駄な事、わざわざやる必要もないだろうに」

「あらん、あたしが頼んでもなの？　・・・ねえ、やってくれるわよねえ・・・」

お母さんのこの一言に、その場にいる誰もが一瞬凍りついた。お母さんのことを知るはずもない、代議士も社長も、取り囲んでいるBBH達さえも。

「仕方がない・・・」

たっぷり30秒は経ってから、ようやく絞りだすように呟くと、父さんは呪縛を振り払うように前に進み出た。

「キヤー、素敵っ。やっぱり、あたしの旦那様だけのことはあるわあ。勿論、カツコ良く指一本でやつつけてねっ」

「指一本か・・・難儀だな」

と、ため息をついた父さんは、相変わらず嫌そうである。

「へんっ、指一本でやれるもんなら、やってみやがれ」

大五郎が動くのと同時に、父さんもスツと前に出ていた。右手はズボンのポケットに入れ、左手を自然にたらしたままだ。

「喰らいやがれ！」

怒号と同時に、大五郎の右腕が霞んだ。何の予備動作もなしに飛来した鉄の拳が、つつ立つたままの父さんを正面から捉えた。大量の落ち葉が土煙と共に舞い上がったその向こうで、大五郎の左腕が真後ろに振られるのに、寸秒の遅れもなかった。

「やるな・・・」

こう呟いた父さんは、サーボスレイブの左拳の上で、さつきと同じ姿勢のまま立っていた。

「おめえさん、ただもんじゃねえな」

そう言う、パイロットの方も尋常ではない。先制攻撃のスピードもそうだし、手加減しているとは言え残像を残して移動した父さんを捉えての二撃目といい、普通ではない。乗り手とマシンの双方ともが軍用クラスの特注品なのだろうか？

「おい、じいさん。あれやっていいかい？」

御手洗のおじいちゃんに訊いたのだろうが、答えたのは僕ん家のおじいちゃんだった。

「好きにやっていいと、お墨付きをもらっとるのじゃろう。思う存分やりなされ」

「ふんっ、ならば、行くぞ！」

辰はそう叫ぶなり、大五郎に派手なポーズをとらせた。父さんは既に拳から跳び退いている。

「モード変換、スウーパーア〜ッ、モオオオオツドッ」

「おっしゃ、スーパモード、スーパモードは、・・・あつた、あつた、これこれ。・・・スーパモード、スイッチオン、つとな」

御手洗のおじいちゃんが、リムジンの横で手のひらサイズのパソコンを操作すると、突然、大五郎のボディのあちこちがまばゆく光り輝き始めた。

「おお、凄い。カツコイイぞ」

「ねえねえ、あの光ってるのって、何か意味があるのかな？」

「特に意味は無さそうじゃがな」

「でも、カツコイイじゃないですかッ！」

「え？ ああ、・・・うん、そ、そうかも知れないね、輝兄ちゃん」

「はっはあ、どうだ！ 凄いだろう。このためにわしが開発した、超高輝度ELMジュールぢや。消費電力半分で、明るさ10倍！」

なんか、本気で相手するのがバカらしくなってくるなあ。

「変換終了！」

光が消えても、大五郎のどこがどう変わったってところはわからなかった。もしかして、ホントに無意味に光ってたのかあ？

「待たせて悪かったなあ。さあて、続きをやるかい」

が宣言すると同時に、大五郎の両手が霞んだ。それと同時に、父さんの周りで風が渦巻いて、落ち葉を巻き上げた。

「どうだ、わかったかい？」

「なるほど、秒間14発か……。もしかして、それが限界か？」

「まさか。今度は、さっきとは違うぜ」

辰は大五郎の剥き出しのコックピットで薄笑いを浮かべていた。

きつと、父さんに勝つ自信があったのだろう。確かに、一秒に14発ものパンチを繰り出せるサーボ^{II}スレイヴなんて、そうざらにはないかも知れないけど。

「いくぜい！」

宣言する声が届いたのと落ち葉が乱れ狂うのが眼に入ると、どつちが早かっただろう。いやそれ以前に、威勢のいい声は方向も音程も狂っていた。高速移動のためのドップラー効果だと気づくよりも、吹雪のように乱れ飛ぶ落ち葉が粉々になってゆく方が遙かに早かった。茶色い粉雪の中に、揺れるようにたたずむ父さんの姿が、僕の眼に焼き付いていた。

(17)

ズンという地響きとともに再び大五郎が現れるまで、それほど時間は経ってなかったのかも知れない。相変わらず、片手をポケットに突っ込んだまま立っている父さんと対峙するその姿は、一見何も変わっていないように見えた。

「少し無理をし過ぎだな」

父さんが静かにこう告げるや否や、シューという音と共にサーボ^{II}スレイヴのボディのあちこちから白煙が吹き始めた。

「オーバーヒートだな」

「オーバーヒートだね」

「じゃな」

「オーバーヒートじゃとく、これだから中古はいかん」

結局、父さんは指一本使うことなく、勝ってしまったわけだ。しかも、全くその位置を変える事も無く。

「くそつ、いいところで。やっぱ、ベースのマシンに問題があったかのう」

「・・・あつたかのうじゃねえぜ、じいさん。後ちよつこのとこだつたんだぞつ」

「辰つ、・・・こ、このおとしめえは、どうしてくれるんだ!」

「お、・・・おやつさん。・・・こ、こんなはずじゃ、・・・こんなはずじゃ、ねえんですぜ。ホントは、・・・」

「ホントはなあに?」

サーボスレイヴの足元から、ゆつたりと聞こえてきたその声に誰もが身を固めた。いったい、いつからそうしていたのか。ずっと、・・・もう何時間もそうやっていたように、気怠るげにマシンに身を寄せて・・・、いや違う。断じて違う。ついさっきまで、高速の戦いがあつたばかりだ。それなのに、どんなに否定しても感覚が告げている。『本当は、ずっとこのままだったんだ』と。そんなことありえないのに・・・。

「ねえ、教えて。本当は、どうだったの?」

もう一度訊いた。誰に? 答えるべきは、辰のはずだ。

「ねえ、本当は?」

そう言いながら、身を寄せている大五郎の右足を撫でさするその手つきは、愛撫に似ていた。

「本当は?」

「ほ、・・・ほ、ほんと・・・」

答えた。誰が?

「なあに?」

「ほ、ほほ、・・・ほん・・・ととと・・・とう・・・は・・・」

「答えているのは、辰の口だ。だけど……。」

「教えて、……ねえ」

サーボ「スレイヴの全身が細波のように打ち震え、毛穴の一つひとつまでが逆立って……、そんなはずは無い！ 金属のマシンの表面は微動だにせず、今も鈍い輝きを放っている。」

「本当は？」

「*****！」

辰が、……いや、サーボ「スレイヴが声にならない声をあげた。鼓膜を微動だに振るわすことの無いその声に、父さんとおじいちゃん以外の誰もが耳を押さえてうずくまった。」

「……そう。そうなの」

お母さんが応えた。赤子をあやすように、恋人を抱くように、愛撫を続けながら。お母さんの瞳が金色に見えるのは、気のせいなんだろうか……。

「……い……いか……ん」

辛うじて絞りだすような声を出せたのは、父さんだけだった。

「かわいい子。叶えてあげましょうね、……そう、……今すぐおじいちゃんですえ、冷や汗を滴らせながら、なす術もなく力チカチと興りのように震えている。」

「だ、……ダメだ！ やめるんだ！」

父さんの叫びが虚しく響いた。振るえる左手で宙を掴むようにしながらも、一步も動けない父さんを尻眼に、お母さんは大五郎の足に頬を擦り寄せるように身体をもたれさせていた。

「さあ、お行きなさい、かわいい子」

お母さんは、父さんの方を一瞥すると、聖母のような微笑みを浮かべながら、サーボ「スレイヴを片手でそつと押し出すような仕草をした。」

「*****++++@@@@@???!?!?!!!!!!!」

はじき出されるように、空中を一気に5メートルも飛翔しながら、

マシンであるはずの大五郎が、この世のものとは思えない悲鳴をあげた。それを聞いた全ての『人間』の肌には鳥肌が立ち、誰もが、目を、耳を、覆った。いや、リムジンやプレハブの硬い金属の表面さえ、ジンマシンのように泡立っているではないか。彼らにも、・

見よ！ サーボスレイブの金属の皮膚の下に、オイルパイプの血管が、電気コードの神経が、リニアサーボモータの筋肉が、それに新たに与えられた機能とパワーに対応させるかの如くに蠢きながら変形し、外板を盛り上げ、・・・いや、その外板さえ新陳代謝をする如く古い金属表面が垢のように剥げ落ち、内側から強化装甲の輝きがきらめいているではないか。

だが、限界を超えた、いや、法則を無視した変形には代償が必要だ。サーボスレイブのコックピットで、今や全身を色とりどりのコードに絡めとられている辰は、白目をむき、よだれを滴らせながら、痙攣をしていた。それだけではない。大五郎自身も、間接部から黒々とオイルを、いや、彼自身の血と体液を滴らせているではないか。

「……………こおおおお、あああああああああー！」

その時、裂帛の気合いが全員の呪縛を振り払った。父さんだっ！
「うふふふ、今度はさっきのようにはいかないわよお」

不敵に微笑むお母さんは、父さんにそう言つてのけた。

「……………間に合わなかったか」

応える父さんは、苦渋に満ちた表情をしていた。お母さんの犠牲者が、また一人増えてしまったからだろう。

「ほらほら、最終ラウンドの始まりよ。観客が盛り上げなきゃ、つままないじゃないよお。さあさ、どっちもそっちも応援するのよっつて、そんなこと言われても、さっきまでの呪縛の余波で、その場の『人間』は誰も彼も押し黙ったままだった。つて言うより、立っているのさえやつとなのだ。

「済まんが、やつは頼むぞい。何が起こるか想像もつかんが、出来

る限りこの場におさめるよう、やってみよう」

おじいちゃんはそう言うと、その場に胡座をかき、目を半眼にして何か経文のようなものを唱え始めた。

「判ってるでしょうけど、ズルは無しだからねえ」

はつきり言っつて、お母さんがサーボスレイブを改造した以上のズルなんて、到底なさそうに思える。どの道こうなっつてしまっつては、誰にも手の出しようがない。唯一人、父さんを除いては。

いつの間にか、周りを取り巻いていたガード達は、VIPの盾になるように、リムジンの前に終結していた。遠目にも、彼らの顔が青ざめているのは、致し方のないことだろう。如何にBBHといっつても、人間には変わりないのだから。極普通の人である議員殿に至っつては、腰を抜かしてしまっつて車の影で震えている。

「・・・ば、化物どもが。余興のつもりが、とんだ事になっつてしまっつたわい」

こんな状況の中で、KN興産の社長は、広場の真中をまっつすぐに睨みっつつけていた。

「辰ーっ！ 聞こえとるか。聞こえとらんかも知れんが。とにかく、わしはもう何も言わん。おめえの好きなようにやりやがれ。そんな変わり、最後まで見届けてやるぞ。おい、判っつたかーっ！」

大五郎に取り込まれ、変わり果てた姿となっつた辰にそんなことが本当に聞こえてるのか、聞こえていても理解できるのか。一時の間、その後、サーボスレイブは両腕を天に伸ばすと、三度、奇怪な咆哮をあげた。迎え撃つ父さんは、静かにマシンを見つめたまま佇んでる。

今まさに、異次元の戦いが始まるうとしていた。

すーぱあお母さんとピクニック【8】

すーぱあお母さんとピクニック【8】

(18)

ついさっきまで落ち葉で埋まっていた広場の中央は、半径5メートルくらいが、まるで掃き清められたように黒々と地面を覗かせていた。先ほどまでの戦いで、落ち葉がきれいに吹き飛ばされてしまったのである。まるで、この最終ラウンドに向けてリングを整えるが如く。

父さんとサーボ「スレイブ」大五郎は、そこに5〜6メートルほどの距離をおいて、対峙していた。片や特注BBH十数人を相手に、苦もなく蹴散らしてしまう超人。他方は、お母さんに強化され、常識を超えた能力を得たに違いないサーボ「スレイブ」・・・いや、いまやマスター「パイロット」システムとサーボ「スレイブ」マシンの主従は逆転していた。もはやマシンですらないのかも知れないな。オイルパイプは生物の血管のように脈打ち、全身を被う装甲は筋肉の盛り上がりを見せていた。これから繰り広げられる戦闘は、到底、人間には感知することは出来ないだろう。いままでの戦いですら、何が起こっているんだかよく判らなかつたんだから。

「うふふ、楽しみだわあ。あゝんな何が何だかよく判らない化け物に、あたしの愛しい旦那様は、一体どうやって戦うんでしょう。わくわくするわよねえ」

あ、あのねえ・・・、そんな目に遭わせてんのは、あんたでしょうが。お母さんの身勝手は、今に始まったものじゃないけど、相変わらず着いて行けん・・・って、お母さんいつの間にかこっちに来たの！ しかも、ポップコーン片手に完全に高見の見物体制じゃな

いか。(もちろん、ポップコーンが父さんのお手製であることは、言うまでもない。)

「ん？ 食べる」

「い、いや、そうじゃなくてねえ・・・」

「しかし、まあ、デザイン的にもう少し、何とかならんかったんかのう。これじゃあ、悪のヤラレメカではないかい」

「なによあ、モンクあんの」

「い、いやあ、・・・なかなかいい塩加減ぢや、ングング」

「じつ、じじい、貴様いつの間につ！ しかも、人ん家のモンを勝手に喰ってんじゃねえっ」

あ、輝兄ちゃんも、ようやく気が付いたみたいだ。

「まあまあ、葵君。そうカッカせんと」

「なあにが、カッカせんとだ。一体全体、誰の所為でこんな事になったと思ってるんだ」

「だ、誰の所為って、・・・わしの所為なのか？ そんな事は無いだろう」

そうだよな。こりゃ、御手洗のおじいちゃんの所為って言うよりは・・・。

「・・・あ、っと」

「そうれ見る。相変わらず、詰め甘い奴じゃ」

「お前なんか、言われとうないわいっ！ それより、何だよ、そのPCDは。音声入力はどうしたんだよ。運動コンピュータがパイロットの固有パラメータを読み取るんじゃなかったのか？」

「別にいいじゃん。ISS (Industrial Servo Slave) のは容量無いし。実際、手で打ち込んだ方が、よっぽど早いからのう」

「は、早いつて、・・・それじゃあ俺が、・・・俺があんな恥ずかしい思いをしてやってたのは、一体何だったんだ！」

「ん、そんな昔の事は忘れたなあ。葵君、そんな細かいことを考えてると、ハゲルぞお」

「・・・ヴ、・・・よつ、余計なお世話だっ」

「おつ、凶星か。もしかして、禿る家系か？ うんうん、可哀想にのう」

「・・・、もう、ぜえ〜つたいに、許さん！」

「・・・す、・・・少し、静かにして貰えんか・・・。そろそろ、・・・きついのがきそう・・・じゃ」

父さん達とは対極とも言える低次元の戦いが始まるうとしていたその時に割りこんできた、おじいちゃんのこの言葉に、僕等ははっとして父さんを見やった。

相変わらずの自然体だが、今度は右手をポケットから出して両手を脇にたらしめている。心なしか、父さんの周りの空気が色が、変わってきているように見える。

「へえ、流石にセーブモードのままじゃ無理って事ね。でも、その子は強いよお。ノーマルモードで勝てるのかなあ」

「お、お母さん、一体どつちの味方なんだよお」

「クスクス。別に、面白けりゃいいじゃない」

そう言っつて、お母さんは得体の知れない微笑みを残した。何を考えてんだか、何も考えてないんだかは、いつもの事なんだけど、僕にはそれ以上反論する気力も体力もなかった。それに、時間も・・・

「うお、・・・く、・・・くるぞ！」

おじいちゃんの苦しげな呻きの直後、ドンという感覚と共に広場の中央が球状に膨らむような錯覚を覚えた。いや、実際、何か見えないものがそこで急激に膨張をしようとして、それを妨げる何かとせめぎあいを続けている。

「よ、・・・予想以上じゃ」

「ぶつうむ。・・・こりゃ、破壊知性体レベルでD級、・・・いや、Cの下くらいはいつてるのう」

「ええつ、・・・そ、そんな。機械化師団一個分の戦闘破壊力ですよ。空自のジ・エイダー(The A - d e r ; A S S T y p e

- Airro)でも、せいぜいD-3級だと言われているのに」

「ん？ ああ、同じASS (Armed Servo Slave)でも、あれは、空自で使うように早期警戒に特化させてあるからう。・・・じゃが、バトリング仕様のザ・ビイダー (The B-der) をフルチューニングしても、ぎりぎりD-1。C級までいくかどうか・・・。米軍の次期制式サーボスレイブ『ゴリラ』でもそんなものだろうな。まあ、特戦隊の『カイザー』シリーズなら何とかなるだろうが・・・。もつとも、要請したところで、こんなところに『別雷神』フケイカツチを打ち込まれては、たまったモンじゃない」

「あの強襲弾道移送コンテナをですか？ 着弾のシヨックだけで、あたり一面が吹き飛びますよお」

「それも面白そうねえ。『建雷神』タケミカツチは今オホーツクあたりだっけ？

あれに、『ライオカイザー』が置きっぱなしだったでしょう」

「ゲゲツ、ま、まさか。確かに、長距離弾道射出母艦の有効射程内じゃが・・・」

「うふつ。あれってえ、造ってから、まだテスト運用もしてないでしょう。せつかく、あたしが清さんのために精魂込めて設計図を引いてえ、完成した後もこつそりチューニングといたのよお。アメリカの機動艦隊だって、一分もあれば3つくらいまとめて消滅させられるわよお。建雷神のコントロールは、もう取ってあるから、後は座標を固定して打ち出すだけつと」

「う、うわあ！ おおお、お願いですから、そそそ、それは勘弁して下さい」

「そそそ、そうじゃ。そ、そんなの、は、反則じゃ。いくら相手がピストルで向かってくるからって、宇宙戦艦を持ち出すようなもんじゃぞ」

「そう？ 一度は動いてるところを見たかったんだけどなあ」

「お、お母さん！ 今はそんな時じゃないよ」

「え？・・・ん、そうかもね」

「そ、そうじゃよ。別雷神が弾道軌道を飛んでくるあいだに、勝負

はついちまつとるぞ」

「うん、まあ、そういうことよね。じゃあ、改めて勝負再開ということだ」

「え？」

僕らが、御手洗のおじいちゃん達との話に気を取られていたあいだ、一体何が起こっていたのか。・・・何も起こっていなかった。それどころか、KN興産側の連中も含めて、目の前の全てが、その時間と空間が凍りついたように静止していたのだ。

「お母さん、これって・・・」

「ん、あんただって、トイレに行きたい時には、ビデオは一時停止にするでしょう」

「い、いや、そういう問題では・・・」

こ、こんなとんでもない事が起こっていても、お母さんにはビデオドラマ程度でしかないのかしらん・・・。ってゆくか、そんな事が普通できるモンなのか？

「ん、ちよつと巻き戻した方がいいのかな」

お母さんはちよつと目を細めて、固まったままの父さんを達の方を見ていた。静かに立ったままのお母さんの周りを、風が静かにすり抜けていく。その一部が、かすかに色を帯びたように見える。お母さんにまとわりついた風は、そのまま父さん達のいる空間を撫でるように吹きすぎて行った。そして、何か妙な違和感とともに、再びドンという感覚が僕らを包みこんだ。

(19)

「うお、・・・く、・・・くるぞー！」

おじいちゃんの苦しげな呻きの直後、ドンという感覚と共に広場の中央が球状に膨らむような錯覚に捕われた。膨張しようとする見えない球体と、それを抑えこもうとしている、これも不可視の何かとが、そこでせめぎあいを続けている。

「よ、・・・予想以上じゃ」

「ふうふうむ。・・・こりゃ、破壊知性体レベルでD級、・・・いや、Cの下くらいはいつてるのう」

「ええつ、C級破壊知性体と言えば・・・って、じじい、これじゃさつきと同じじゃないか」

「いや、すまんすまん。つい、つられてしまつて」

ア、アホはほつといとかないと。

で、肝心の父さんは、変貌してしまった元『大五郎』から吹きつける凶暴な殺気の中に凜とたたずんでいた。

寸秒の後、突然、何ごとも無かつたかのように殺気が消滅した。

父さんの目許に涼しげな微笑みが浮かんでいる。心なしか大五郎が後じさつたように見えたが、次の瞬間、何の予備動作も見せずに、大五郎が跳躍した。直前まで立っていた地面から、大量の土塊が何故かゆつくりと後方に吹き飛ぶときには、本体は既に3m先の空間に浮かんでいた。それから徐々に、本当に徐々に地面が陥没していく様が見てとれた。

「な、何かこれって・・・、スロー再生？」

「ね、見やすいつしよ」

さも事もなげにお母さんは答えてるけど、これってトンでもない現象じゃないのかなあ。

「ま、音の方はまともに聞こえないんだけどさあ。音速つて、光よりべらぼうに遅いから、同時変調つて面倒臭いんだもん。ごめんしてね」

「は、はあ・・・」

輝兄ちゃんも、さすがにあっけに取られている。いったい、何倍くらいに時間が引き伸ばされているのだろうか？ 父さんへ向けジャンプした大五郎は、まだ空中を飛翔している状態で右腕を繰り出した。とうてい届くはずが無いと思えたそのパンチだったが、右腕が伸びきつてもその拳は父さんに向かって直進していった。大五郎の右肘は、半ばちぎれながらも伸長しているのだ。ミリミリという

破碎音さえ聞こえてきそうなほど凄惨な光景である。射程外から絶妙のタイミングで大五郎のパンチが届く寸前、立ち尽くしたままだった父さんの姿が左右二つに分れた。高速移動の更にも上をいく超高速移動の結果生じた残像現象とは解ってはいても、瞬間的には分身したようにしか見えない。大五郎の拳はちぎれかけた腕ごと、二人の父さんの間に虚しく消えたが、それを追って着地した本体は、そのどちらにも目もくれず垂直にジャンプしていた。

僕らもそれにつられて上空へ目を向けると、そこには3人目の父さんがいた。というより、これが本体だろう。この場合、左右への分身を囿にして空中へ飛翔した父さんを誉めるべきか、それを瞬時に見破ってジャンプした大五郎を称えるべきか。

いかに父さんでも、足場の無い空中では重力と慣性の法則に従うしかない、・・・はずだ。もう既に降下に移っていた父さんは、引き伸ばされた時間の中で空中に静止しているように見えた。対する大五郎は上昇中。そのまま一気に間合いを詰めると、大五郎は空中でちぎれかけた右腕を、そのまま鞭のようにふるった。間一髪後方回転でかわした父さんは、信じ難いことに空中で2mも後方に移動していた。大五郎の腕と交差する刹那、その拳を足がかりに、後方へ跳んだのだ。

大五郎は、右腕を引き戻す反動を利用して間合いを締めようとす。地面はまだ遠く、もう足場は無い。放物線を描いてゆっくりと大地に向かう父さんに、次の攻撃をかわす術はあるのか。目前に迫った大五郎は、今度は左腕を繰り出した。

「あつ！ 危ない」

間一髪かわした父さんだったが、その背中を右拳が狙っていた。一体どんな仕組みになっているのか、ちぎれかけた右腕は大きく湾曲しながら父さんの背後から後頭部を砕いた。

「おお！」

今度こそ、その場の全員が驚愕した。父さんの頭を打ち砕いたかに見えた右拳は、影のように通り抜け、大五郎自身の左手で受けと

められていた。砕いたと見えたのは、これも残像だったのだ。のみならず、宙に浮いたサーボスレイブの周りを、何人も父さんが取り巻いている。足場の無い空中で残像をも発生させるほどの超高速移動ができるものなのか。

いや、ある。足場はあった。父さんは宙に舞っている無数の枯葉を足がかりに移動しているのだ。その動きは地上にも引けを取らない。ほとんど重さの無い枯葉に、どれほどの負荷がかかっているのだろうか。瞬時に分子レベルにまで粉碎された枯葉のなれのはてが、大五郎をぼんやり取り巻いている。

今や攻守は逆転した。大五郎は長短の両腕を振り回すが、それは虚しく空を切り、あるいは虚像を貫くだけだった。大五郎が地上に降り立つまで後1m。突如、無数の父さんが一斉に消え去った。大五郎がその頭上を見上げる。そこに、地上を遥かに望む上空に、化鳥の如く舞う父さんがいた。

大五郎は、自らの右肩を掴んで根元から引きちぎるなり、頭上へ大きく振りかぶった。ちぎれてポロポロの右腕だけでなく、掴んでいる左腕すらもちぎれ伸び、長大な鞭と化して上空の父さんを狙う。それを空中の父さんが迎え撃つ。

「出るぞ！」

「よし、ナツクル・バスターだっ」

「違うと思うよ。あれは、・・・」

「そう、あれは・・・」

『荷重力破砕弾！』

空中で大五郎の拳を父さんの拳が、いや、拳の先につき立てられた人差し指が迎え撃った。そこに一瞬、黒い球体が生じ、そこを中心に不可視の何か噴き出してきた。

「う、うおおおお」

またも、巨大な何かが球状に広がって行く。それは、一瞬おじいちゃんの結界に阻まれたが、次の瞬間それを突き破って爆散した。

すーぱあお母さんとピクニック【9】

すーぱあお母さんとピクニック【9】

(20)

おじいちゃんの結界を吹き飛ばした爆風は、僕らに吹きつける直前、ビデオの逆再生のように急速に収縮しはじめた。それは、またたく間に最初の一点に、父さんの指先の黒点に集まると、大五郎の拳の中に染み込むように消えていった・・・

そして、そよ風に乗って流されるように、父さんはふわりと地上に降り立った。もう、さつきまでの違和感はない。普通の時間軸上の世界に戻っている。にもかかわらず、大五郎は引き伸ばされた腕を頭上に伸ばしたままの姿勢で静止していた。

父さんは固まったままの大五郎に背を向けると、ゆっくりと僕らの方に歩き始めた。決着はもうついたのだ。一步、二歩・・・、三歩目で変化が現われ始めた。心なしか、父さんの表情に哀しげな陰りがよぎったように見えた。

四歩、五歩、・・・六歩目で、それは誰の目にもわかるまでになった。中空高く伸ばされた大五郎の腕が、先端の拳から雑巾をねじり絞るように、くしゃくしゃにつぶれながら破壊されて行く。その破壊は、またたく間に肩にまで到達すると、大五郎のボディが何か巨大な手に握り潰されるかのように、ひしゃげ、押し潰れて行った。ついに耐えきれなくなったのか、大五郎が片膝をついた。ズシンという地響きとともに、足下の地面に細かな亀裂が生じると、大五郎を中心にして、見る見るうちに陥没していった。

「わわあ！ ま、まずい。わしの施設があー！」

破壊音と土煙の舞いあがる中で、KN興産の海道社長の叫びが虚

しく響いていた。

「じゃ、社長、いけません。この先は危険です。」

上下につぶれた相撲取りのような体躯を、何人も護衛達に取り押さえていた。

「あの施設にいったいいくら注ぎ込んだと思ってるんだ。後もう少しで完成だったんだぞ。あれさえ完成すれば、・・・」

「海道君、この失態をどう繕うつもりだあ！」

ごく小規模な地震の中で、代議士もよろめいていた。

「終わったの・・・」

おじいちゃんが呟くように父さんに話し掛けた。

「しかし、無茶をしおる。なにも『荷重力破碎弾』なんぞ使わなくとも、『雷鳴波』でも『亜空破断』でも良かったろうに。結界を張つとるわしの身にもなってみろ」

「・・・『亜空破断』を指一本で放つのは、ちょっと制御がきついですから」

「ふん、指一本にこだわりおつて。この、ええカツコしいが」

そうなのだ。父さんは、お母さんの言った、『カツコ良く指一本でやつつけて』を忠実に守つたのだ。それさえなければ、きつと、もつと早くに勝負はついていたに違いない。

「カツコ良かったぞ」

「うむ」

お母さんに言われて、父さんの顔が心なしか赤らんでいる。まんならでもないらしい。

「うーん、もう、そろそろかなあ？」

「そうだな・・・」

何がそろそろなんだかよくわからないが、お母さんの問いかけに父さんは、大五郎の沈んだ陥没を眺めた。ひしゃげたサーボ・スレイブの頭が飛びだしているところを見ると、陥没の深さはそれほど深くはないのかも知れなかったが、その端は傍らのプレハブを飲み込むほどに広がっていた。陥没からは、異様な色と臭いの煙や火花

とともに、あの赤緑色の液体が至るところから噴出していった。

いつの間にか、2台のリムジンの周囲に白衣の男たちが二十人ばかり群がっていたが、きつと、この地下施設で働いていた人達だろう。誰も彼も、どこかしらに傷をおっていたり、咳込んでいたりしているところを見ると、地下施設は惨澹たるありさまだったに違いない。

「くっそう！ てめえら、このまま済むと思ったら大間違いだぞ！」
地下施設の破壊音の轟く中で、海道社長の罵声が届いてきた。それに呼応するかのように、黒服達の半数が掻き消すように消えた。

「確かにその通りじゃな……。じゃが、代償を払うのは、果たしてどっちか……。」

おじいちゃんが咳くのとほとんど同時に、陥没の中心部、ひしゃげて見る影も無い『大五郎』のボディが弾けると、無数の異様な色彩の触手が四方八方に向け飛び出していったのだ。ちよつと日本語がおかしいけれど、一瞬にして広がった触手のあまりの早さに、実際僕にはそう見えただ。そして、その触手には何人も黒服達からめとられていた。きつと、僕らに報復しようとしていたんだろうが、触手のスピードは、違法BBHであるはずの彼らを凌駕していた。

「う、うわあ！ 何だあ、これはっ！」

不気味な触手は、うねうねとうごめいて、僕らを襲おうとしたガード達だけでなくリムジンの周りに陣取るKN興産の連中をも捕獲し始めていた。

「大丈夫よ、こっちは襲ってこないから」

お母さんがこう言っても、僕は内心不安だった。

「本当に大丈夫なの？」

「うむ、大丈夫のようじゃのう。もっとも、襲ってきたところで、どうってことは無いがのう。ほっほっほっほ」

「確かに……。」

「わはははは、全て計算通り。わしの改造に間違いは無かった。だ

ろっ、葵君っ」

「うるさいっ、じじい。そもそもあんなガラクタにちよっかいなん
か出すから、こんな訳のわからない事になっただらうが」

「何を言っとする。もともとは、あやつらが違法に強化麻薬なんぞを
作るうとしとつたんが間違いないんじゃ。ま、自業自得じゃな」

「なら、貴様もあいつの餌になつて来いっ」

「うわわわ、やめんか、こら」

また、始まった……。全く、仲がいいんだか悪いんだか。

「うおおっ。は、放せ、放さんか」

「かか、か、海道君、何とかしたまえ。そ、そっちの君達も見てな
いで何とかしてくれえ」

僕等以外のみんなが、議員先生殿も含めて、触手に絡みつかれ、
陥没に引きこまれつつあった。ある者は空中高く掴み挙げられ、ま
たある者は地面を引きずられ。その行為には、相手が代議士だらう
が社長だらうが関係は無かった。彼らはこれからどうなるのだらう
？ 輝兄ちゃんは『餌』と言った。餌、・・・喰われて、果たして
それで終わりなんだらうか……。

「足りそうか？」

父さんが訊いた。何がだらう？

「うーん、どうだかね。何とかなるとは思っけどお、・・・あと一
人が二人投入すれば確実なんだけどねえ」

お母さんは妙な事を言っと、チラッとまだ争っている輝兄ちゃん
たちを一瞥した。

「ひっ……………」

二人とも、瞬時にその意味するところ察したのか、真っ青になっ
て掴みあつたまま固まってしまった。父さん達の言っている意味と
は……

「まっ、大丈夫でしょう、BBHもいるし。それにあの社長さん、
あんだだけ元気があれば、BBH以上に効果があるんじゃないのぉ」
「本当か？」

「あたしが信じられない」

「・・・い、・・・いや・・・」

「そ。じゃあ、最後の仕上げといきますかっ」

お母さんは、そよ風にたなびく髪を掻き上げると、幾本かの髪の毛が絡まった手を頭上にかざした。そこで僕は初めて気が付いた。風など最初から吹いてなんかいない。全く風の吹かない中で、僕の顔は汗でじっとりしていた。だのに、お母さんの指に絡まっていた髪は、あるはずの無い風に乗って陥没の中心へ向かって飛んで行った。一体どうやって？ 悩んでも無駄な事なのはわかっていているんだけど・・・。

それ自身に意思があるように、細い、黒い、長い髪の毛が数本、飛んで行く。それは、KN興産の人達を巻きつけている不気味な触手がうねくる中を、陥没の中心付近、『大五郎』の沈んだ所へ吸いこまれるように消えた。いや、見えなくなっただけかも知れない。

「お、お前達！ た、助けてくれ。か、金なら幾らでも出す」

「わしを誰だと思ってるんだっ！ わしにこんなことをして、ただは済まないぞ。今なら、御便に処理してやるから、早く何とかするんだ」

この期に及んでも、議員先生も社長も往生際が悪かった。

「ま、諦めな。あんた達、手を出した相手が悪かったんだ。自業自得だよ」

「な、何？ 訳のわからんことを言わずに助けてくれ」

「くつくつくつ。いくら田舎もんのアなたでも、代議士の端くれなら噂だけでも聞いた事が無いかな・・・」

おじいちゃんは意味深な言葉のあとに、ある名前を告げた。代議士はしばらくの間、自分の記憶の中をさまよう如く、痴呆のような顔をしていた。そして、何か思い当たることがあったのだろう、見るみるうちにその目が見開かれ、たちまち驚愕の表情となった。

「思いだしたか・・・このうつけ者が」

「・・・そ、そんな、バカな・・・あ、あれは、伝説の・・・」

まさか、そんな・・・お前が・・・」

「そのまさかだよ。『アカシアの女王』に逆らって、安らかに死ぬことはできないよ」

「ん・・・、施設との同化はほぼ完了したようだ。・・・後は、お前達が後始末をするんだ」

「な、な、何のことだ」

「今にわかる」

父さんの言葉が終わるよりも早く、その意味する結果は現われ始めた。軟体動物の一部のようになぐり動いていた触手は、急速に動きを失い、みるみる内に変色と硬化を開始した。それはまるで動物から植物への変態を見ているようだった。同時に、触手に捕われた人達にも変異は及び始めた。肌が色を失い、樹木のような色彩を帯びていく。それは、醜くうねり、剥き出しとなった大木の根に人型の実をつけた、巨大な植物を思わせた。施設を取り込み、触手に捕えた人間をも同化して、一体何が起ころうとしているのだろう。

「うとうとう、・・・た、助けてくれえ・・・」

こんなになっても、人間としての意識は残っているらしく、誰も彼もが、苦しみうめき、助けを求めている。

「んふ、変換終了つと。後はがんばってねえ、みんな」

お母さんは、見る影も無くなった彼らに投げキッスを送ると、ルンルン気分でその場を後にしようとしていた。

「ちよ、ちよっと待ってよ、お母さん」

お母さんに見れば、こんな事でも単なる暇潰しでしかないのだろうが、このまま彼等を放ったらかしにして大丈夫なんだろうか？ 国会議員やヤクザの親分だっているんだぞ。

「あの人達、置いて行っていいの？ このままじゃ、大騒ぎになるんじゃないの」

「え、面倒くさあい。そんなの、もう関係無いじゃないのよお」

「・・・か、関係無いって」

「別に、何ともならんじやろうて。悪徳代議士の一人や二人いなく

なっただって、どおつて事はない。ましてや、ヤクザモンが何人いなくなるうが、知ったことじゃなかるう」

「世の中って、そんなモンなの？」

「そんなモンじゃよ」

おじいちゃんに諭されて、僕はそういうモンなのかなあと思った。

「さて、帰るとするかい」

「うん」

おじいちゃんは、軽く伸びをすると、お母さんについてスタスタと帰り始めた。確かに、そのままここ残っても、どうしようもない。僕も後に従って、その場を後にしたんだ。

(21)

「ところで、あの人達つて、これからどうなるの？」

僕は、帰り道を歩きながら父さん達に訊いてみた。

「うん。あそこで、ずっと大地を浄化する装置の一部として生きて行くことになるかな」

「ずっと？ 死なないで、あのまま固定されっぱなしなんて、退屈するかなあ」

「それはどうだかな。彼らのタレ流していた破棄物は、かなり質が悪かったから、浄化・精性作業には相当の苦痛が伴うはずだよ。退屈してる暇なんて無いだろうね」

「ふうん、そうなんだ」

「おまえ、わざと意識が残るようにしただろう。完全なマシンとして組み込んだ方が、効率が高くなるはずだよ」

「ん？ 何、それ。そんなややこしい事なんか、もう忘れちゃったわよ。・・・でも、まっ、そうかもね。10年かかるか20年かかるか知らないけど、せいぜい頑張つてキレイにしてもらおうね」
「・・・そうか。まあ、いい」

お母さんと言葉を交わした父さんには、どこかしら誇らしげな笑

みがよぎっていた。

「ねえ、ところで、あの地下施設って、一体何を作ってたのかなあ。国会議員とかがかんでたけど、きつとそれで儲けてたりしてたんだろっな」

「ん？ そうだな、何作ってたんだか……。何だろうが、タレ流しの副製廃棄物がまともじゃないんだから、どう考えてもまっとうなモノじゃ無いには違いない」

「そう……。でも、これで源蔵爺さんも安心して暮せるね」
「そうだな」

「あの原っぱも、早く元に戻るといいね。……。そう言えば、アカシアのなんとかって何なの？」

「んー？ そんな事言ったかなあ？」

「そうだったけ？ まあ、いいや。」

今日は何だかいろんな事があつたけれど、それなりに充実した一日だったね。連休はまだ一日あるけど、明日からまたいつもと同じ退屈な日が戻ってくるんだと思うと、お母さんじゃないけど、ちょっとだけ憂鬱になった。

・・・その後、国会議員行方不明の報が小さく新聞やテレビのニュースで取り挙げられた他は、荒廃した山や異様な浄化システムについては、何事も無かったかのように、ただの一つも報道されなかった。警察が事情聴取にくることも、ヤクザがし返しに来る事さえなかった。唯一、ネットワークの掲示板で、KN興産がつぶれたらしいとか、その裏に対抗する暴力組織がいるとかの無責任な噂が一時的に飛び交ったくらいだ。

ちなみに、このピクニックに行った日から一月くらいしてから、僕らのところに源蔵爺さんから一枚の絵葉書が届いた。KN興産が引き上げた村は若干寂れはしたものの、少なくとも源蔵爺さんへの嫌がらせだけは無くなったそう。さすがに数週間では膨大な土壌

廃棄物の浄化は進まないようで、山林のほとんどは依然荒廃したままだそうだ。（源蔵爺さんは、あの『浄化装置』については何も知らないはずだが）

ただ、源蔵爺さんの想い出の原っぱだけは、これまで手入れをしてきた甲斐があつてか、部分的に緑と花を取り戻したらしい。じいさんは、この調子で山全体を復活させると、意気込んでいた。

実は、源蔵爺さんの絵葉書は復活した原っぱを写したものだ。近所の知合いに頼んで、わざわざデジカメで写してもらったんだ。うだ。懐かしい禿頭の背後には、茶褐色の荒地の中に、そこだけ燃えるような緑の草葉と、狂ったように芽吹き咲き乱れる色とりどりの花々で飾られた『人型』の花畑が写っていた。そこは、偶然にもこの間、ピクニックに行った時に、お母さんが暇そうに寝そべっていた場所であつた。

（了）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6529u/>

すーぱぁお母さんとピクニック

2011年7月29日07時42分発行